

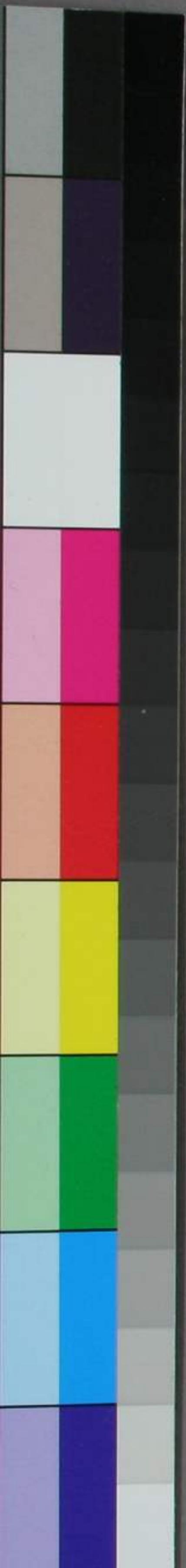
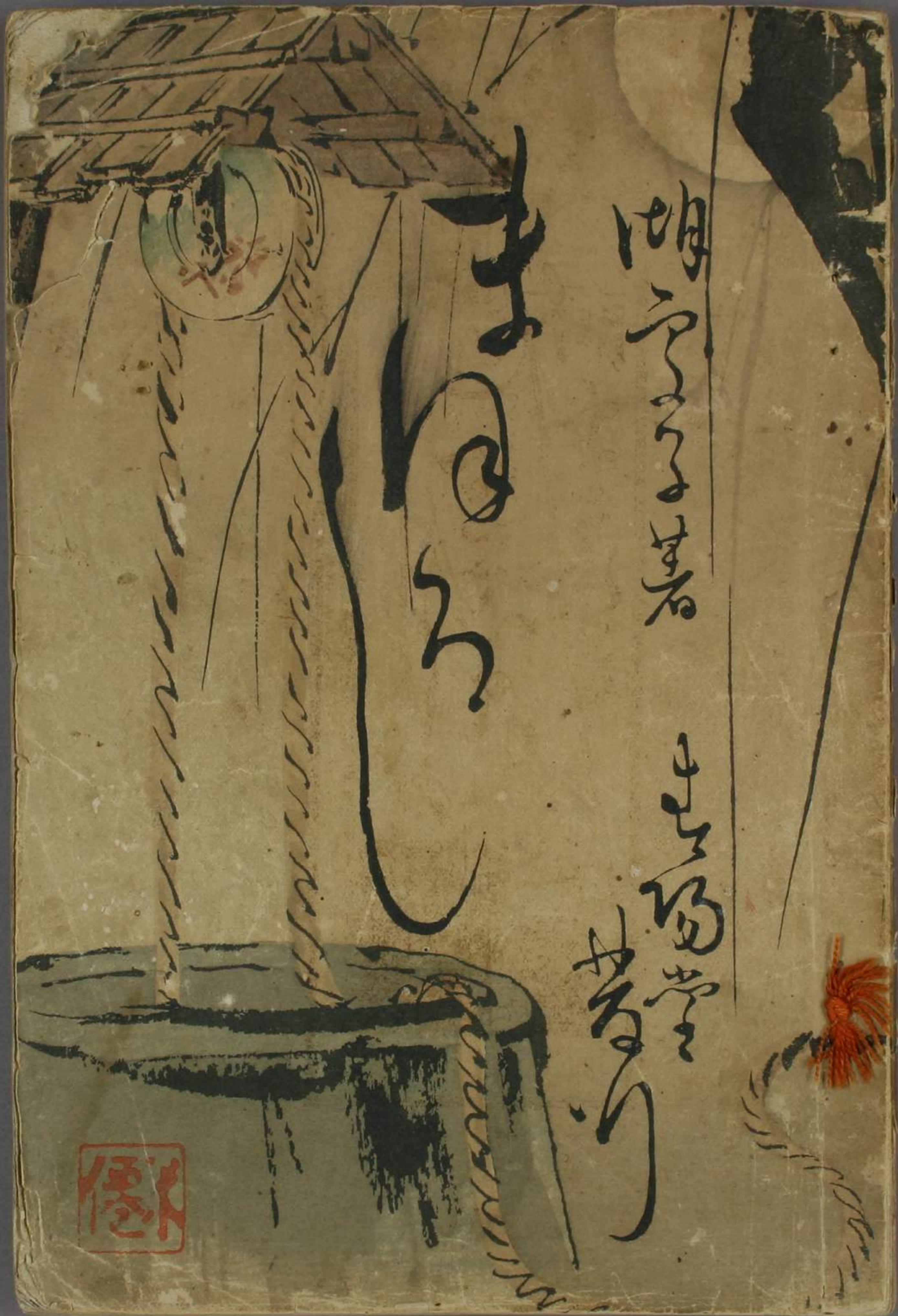
80

75

70

65

60







## 幻影

## 第一 四條橋

湖

處

子

著

三百の樓臺半は高く青雲に入れり。三十六個聯なる峯は自然の屏風を開きたる  
ものゝ如く祇園坊を擁して立てり。他山の巔に宿れる夕日は没むとして猶ほ餘  
影を曲中に残してあるなり。空を亘りて彩る欄は宛然紫雲の靉々が如く、簷より  
簷に書ける壁は牡丹花の耀くに似たり。鏡臺を繞れる寶篆の烟は恍惚として  
前夜の夢を追へるにはあらずや。帷帳に浮べる翡翠の翼は翩翩として羽衣の舞  
を留めたるにはあらずや。悠々として流るゝ鴨江は銀河の如く隔てゝあれども、  
長霓を形せる四條橋は猶ほ烏鵲橋の如くに懸り、樓々の複道の尾端に連り来る  
人を渡さんとすなり。天然の美技術の精既に歌吹城裡のものとなれるが上に人  
間の仙子欄に倚り手を擧げて招く姿すら見ゆるなり。夫の今日家の理想の天國、  
希望の樂土、たゞひ茲處にあらずと云ふとも、豈茲處よりは遠からむ哉。

夜の巷に厭れたる長き日影も遂に沈めり。曲中處々徐々に翠簾を捲き初めたり。四條橋の上には車を曳くもの曳かるゝもの馬を追ふもの、追はるゝもの足に任せて走るもの、他の後に隨ひゆくもの、肩を摩り腕を交へて雜沓し、恰も垤を發かれたる蟻群の如く、風に吹かるゝ落葉の如く、無意無心に右往左往するものゝ如く迷へる間に、橋上には湧き且つ消ゆる波上の泡徐ろに人間の無常を告げ、軽く流るゝ水の音は偏に人生唯行樂と歌へるなり。

此夕舊都遊覽の同伴と見えて鄙びたる老男女の一一行、此方の橋標を圍繞、江上の暮色を隔てゝ、歌吹城裡の繁華を想像れり。最も老ひたる甲男太と驚きたる氣色にて遊廓とか、さてはあれが遊廓か、田家にありて遊廓と聞けば、巷の一隅に小く隠れてあるものとのみ思ひたるに、斯くも公然たる大巷の大館都の都とも云ふべき繁華よ。別て彼方と此方に對立る三層樓は、城郭を見るかとばかり思ふなり。賢けなる乙男硬くるしき聲にて「さなり遊廓の廓と郭と、文字より國音まで似て居るあり」。羨ましげに青樓を凝視してありし最も壯き丙男、あの通りに翠簾まさ上げたり、曲々に舞ひ歌ふも間あるまじ。甲男見ぬうちこそ魔界地獄とも思へ斯

(三) 橋條四

くして見れば天上とも極樂とも覺ゆるもの、世人の珠數を棄てたくなるも無理かや。乙男、虛無渺茫の間にありける蓬萊仙島、今眼前東山の此方にあり、巫山の夢買へば買はれぬものにもあらず。甲男、田舎漢の徃くべき所あらねど、せめては其家の建築、庭園の結構なりとも一見してゆきたきものなり。甲女、かかる綺麗の家に養はるゝは、そもそも如何なる姫やらむ。夜具、衣裳、髮の裝飾、見るも眩ゆきとなるべし。乙女、實に此魔界が極樂なりとは現世と未來は眞逆倒なり。丙男、兎に角に偶々の事なれば、茲處より遠く眺めむより、徃て細かに見むには如かじ。乙男は一笑して、またも寡人の病發りぬ。清水閣にては茶店の婢にすら茶を渡したる御身にして、またも寡人の病發りぬ。清水閣にては茶店の婢にすら茶を渡したる御身にして、一笑すれば百媚生る傾城傾國の楊太真を見せなば、流涎彷徨して返るを忘る、つて難儀の春なり。止なむ哉、止なむ哉。甲女は可笑しく、男の人の兎角に思はる、も理よ。女すらも何となく衷壯くなるものを。乙女は念佛の口調もて、止み玉へよ。詣るべき寺院さへ遣さすば、さる魔界は見るとも見ぬとも。斯く相語へる間に、一個壯年の男、今しも橋を渡らんとしつ、熟々同行の一人を見

て橋標に進みより其顔の如き鈍やかなる調子にて御身は六右衛門主には在さずや。振回る一同の顔を見てヤ、龍藏先生、兵吾主。や、これは阿谷刀自、阿瀧刀自、今は京都遊覽の旅にて在すや。甲男なりける六右衛門思はざりき儀助主、御身に茲處にて逢はむとは久年の思ひ立て龍藏先生は名所古跡、我等は本願寺参詣に上京りぬ家を出る時御身の兩親、御身の所在は明かあらねど、若し途中にて遇ふともやと種々の傳言に加へて土産物までも耗まれしが茲處にて遇ひしは僕侍なり。と、懷紙と墨管を取り出し、宿所を記して渠に與へ我等の旅宿は茲處なれば今宵必ず訪はるべし龍藏先生と云へる乙男さてまた御身の今日の落つきは儀助は太と恥しげに頭を搔き偶々邂逅ても面目なし。國を出てはや七年を過れとも、何の成し得たる所もなく、五年以來祇園坊に仕めてあり。乙女なりける阿瀧この廣き都に祇園坊に仕めらるゝとは丙男なりける兵吾さてこそ見まがう男になつたれ故郷に歸らぬも無理はなし。祇園坊にて何と云ふ店なるや。儀助茲處より見えたる此方の三層西陽樓と稱へし、此曲中にては繁華第一の青樓なり。阿谷洪大なる建築と見てありしが、さては御身の仕る店なりしかなるほど第一の曲な

るべし。他方は何と云ふ店なるや。儀助あれは東陽樓と呼びて近頃開きし店なれども今は西陽樓と競ひ居り、其主婦は吾身の先主の妻なれど、兵吾御身の店の子店なるにや否、子店にあらず敵對なり。こは故こそあれ、五年以前先主身没り世子みせられぬ。此女は奸しき質なれば、娘の助言を聞かざるのみかは却て其人を無し幼稚かりければとて、其弟なる今の主人管理者に立ち、妓女の首なる阿國と云ふをてければ、主婦は其家の空しくなり、夫婦の顔の地に落るまで止まじと出で某太守の貯妾となり、其人の力を藉りて夫の三層を起されたるに、頭初より世評よくして、未だ四年を経ざれども、西陽樓を凌ぐばかりに榮ゆけば、人は皆此曲中の女丈夫とて驚嘆きあへり。世子も自個の手より修業せしめて、去年帝國大學に進まれしとぞ聞く。阿瀧御身は何故さる善らぬ人の許に久しうあるや。主人の善とも悪とも、店の誰が手に歸するとも、吾身に聞はることにもあらねば、其まゝに仕められり。龍藏先生は見送りつゝ、憫笑して居るに仁なる里を擇ばず、仕ふるに其主を擇ばず、糞土の墙は塗るべからずとは渠が謂なり。

## (六) 幻影

儀助か橋上の雜沓中に没影なれる間に、大學の印彰鉗つたる夏帽を蒙り、白羅紗の服を着け、黝く光れる革囊を提げたる青年の學生、また此橋標に來りて立ち、同しく祇園坊の方を見やれり。渠等は心づきたる容子もあく、風説を縁にして、區々に夫の女丈夫を評しあへり。龍藏夫子が「貞女不見兩夫」この經文を引きて、一言に非し去るにも拘らず、六右衛門は其志の雄々しきに服し。兵吾は太守の寵妾の容色を想ひ、阿谷は只管其の女丈夫たるに感ぜり。最後に阿瀧は兄の家を守りて、嫂を出しむるは固より邪見の業なれども、發心入佛の縁ある身にして、節操を破るばかりかは、益なき怨を報いんと思ふ心太と罪深し。世には徒なる人の多く後世を願ふの少しこそ返す返すも口惜しけれ。

斯て六右衛門は日は疾く没りぬ。昨日の如く逆旅を見失ひては便あし。明き間に乞玉ごと相喚び促して遂に橋を渡らずして還りぬ。

大學生は一個佇立み、一行の巻を折れゆくまで見送りて太息を發きたり。渠等はそもそも如何なる人ぞ。渠等の語中、貞女不見兩夫こと云ひ、兄の家を守りて其妻を出でしむと云ひ、殊に發心入佛の縁ある身云々と云ひしは、明かに吾家と吾母とを批

## (七) 橋條四

評せるものなり。さては久我氏の名の汚れも、翁媼の耳より耳に傳へて、知らぬ國まで聞えなむ乎。猶ほ怨めしげに歌吹城を眺めて、彼處が大學生の故郷乎。砂漠塵烟のうちに横暴を行ひ、罪惡の呼號天に聞えしソドムゴモラは、既に大火に焼かれたり。面を塗りて裡は腐れ墓より朽たる祇園坊茲處が吾身の故郷なる乎。紳士淑女の高會に在て、各々故郷を問ふるゝ時、深山幽谷に清泉響き、仙者の逍遙する處に吾家ありと云ふもあり、牛羊芳艸に戯れ、幻影の梯子より天使の昇降する牧場に、吾母住みぬと云ふもあり、或は汀に蓮葉浮び、詩人の歌ふ池頭にとも云ひ、或は秋夜明月の下衣を擣てる里とも云ひ、聞く人ごとに心を動かさぬものとてなきに、我は唯西京と答へて幾人の前を遁れてありしが、今歸る故郷はこの曲。——明憲淨几に心を洗ひ、青野の景色に眼を清め、朋友淑女の交際には宛然天使の如く高く舉りし昨日の我、今日此淵に墮來りて、千尋の汚泥に沒れやせむ。——此は猶ほ忍ぶべけれども哀哉、偶々の歸省に我か學問の進歩を喜ぶ父も今は無く、闇に倚りて待つべき母は、有れども猶ほ無きが如し、然して叔父と妓女の首と吾家を占領して、我をば餘瘤の如くに思へり。如何ばかり、憂き歸省ぞ。——今回は我父の

遺産を叔父より受け、母を醜辱の淵より拯はん爲にて歸省すなれども、吾力能く底なき叔父の心淵を測り、進みて退かざる母の氣象を回すに足るや否や。悵然として頭を回せば、稍行人も少なる橋の他端に、美しき童女の姿顯はれたり。艶かかる浴衣着たれど容貌は太と窈窕しく見えたる、豈けき袂に晚風を包みて、悠々と歩み来れども、路上と橋上とに交々細かき視線を向くるは、人を尋ねて心焦てるものにも似たり。

大學生は童女の姿を警視して、渠は家の阿玉にあらずや、去來る人に目を配るは、我を迎ひに來しにはあらずや。少からぬ童女の裡容色と云ひ心情と云ひ渠に如くものなきのみならず、其舞曲すら専門の舞媛の嫉む所となるまで妙なる寧馨兒なれば、私は強ちに憎むにあらねども、然れども大學生と舞媛と果して何の關係あるや。相者が所謂ゆる無智の美假面を蒙りても外出すべき渠、唯々亡父の遺産の一箇と云ふ外、大學生と舞媛と果して何の關係かある。斯く人多かる橋の上にて舞媛に迎へらるゝは大學生の帽子の汚辱語を接すすらも恥辱なり。去りながら見よ、渠は宛も淑女が情郎を見て喜ぶどく、我を認めて微笑むなり。久しく相

見ざる間に、美しくも生長けるよ。されど大學生と舞媛と、大學生と舞媛とは十步の間に相遇はむとせり。渠は疾く身を群衆の裡に没したれども、其人より外に的なく見ゆる舞媛の目は、渠を追ひて再び橋上の他端に認め、渠か知ざる爲して過んとする時、相去る五歩の前に立て、嫣然と笑みて、郎君と喚びたり。渠は冷水を蒙る如く慄然としつ、再び無言に往き過ぎむとせしかども、郎君は何爲に遅なはり玉ひつると邀へ遮りて呼ぶ愛嬌の餘りに罪なく且つ憐れに見えければ、遂に情無く往かむ様なく、前後を擁まく群衆の視線の裡に面をへるにや。舞媛は太と無心に答へて、否、主人は何とも宣はねども、妾は疾より一と夕の影とを歎び迎へぬ。

## 第一 西陽樓

其一 書齋

巍然たる高閣宛然樓上の樓とも見えたる三層樓欄とに裡も見ゆるばかりに翠簾捲あげぬ。石門の篆額に彫りたる西陽樓の三個の金字は、額上の銀燈と相映じて、奥幽き狹路を照らせり。門を挿める兩樹の柳は、微風に搖られて街前の行人を招き、其梢より騰る烟は、恰も戀の使者の如く、相分れて四方に駆せつゝ、宏莊華麗、富豪韻致、大凡歌吹城裡に缺ぐべからざるもの。一個として具備せざるはなし。奥には一頃の廣庭ありて、豊かに湛ふる湖は處々に大石小石を浮べ、間断なく噴く龍口の水は、繰れる汀の菖蒲を青め、金鱗玉尾は限なく波間に游ぎ、然して他端より起れる假山、さも大月を半截せるが如くに圓く立てり。庭の右邊には、一層一層重なる闇の開放ちたる窓より、或ひ低語き、或は偷視ひ、或は相呼び相響へつゝ、失笑ふ妙音も聞えぬ。庭の左邊には竹様を以て聯ねたる主室、客室、書齋の三室湖を隔てゝ、三層に對せり。少年少女は今しも書齋に入來れり。舞媛は嬉しさに心浮れて、學生の身邊に追隨しつゝ、花を追ふの蝴蝶の如く、自然の愛の舞曲を舞へる間。

に樓上よりも窮に偷視る紅顔もあり、湖右を見れば不夜城の歡樂の多少を想はしめ、湖左を窺へば坐ろに青樓の子に生れざるを悔しむ。然れども渠は唯回視一遍したる儘、冷然として頭を復し、直に坐して障子を閉めた。阿玉は最と訝しき顔して郎君の面を視。此方の室は日影を受けて一倍暑く、僅に庭より吹來る風に凌ぐなるを、其處閉め玉ふは風邪にても感きて在すや。否。阿玉は再び問はむとせしかど、儼然たる郎君の氣色犯すべくも見えざりしかば。短玉は、渠の隙より、竊に外面を窺ひ、つゝ男子を見て喜ぶ婦よ。世間は爾を美の神女赫耶姫の愛子と賞めぬ。爾は既に遊君と云ふ佳名を得たり。遊君と云ふ辭は幻詞、雅言にとせば我は直ちに「惡魔の花」と爾を呼ばむ。神世界を造り玉ふや、惡魔手を擧げても適へるなり。歌よむ人は爾を讀めり。爾は唐詩の神髓となれり。猶ほ以て足らず世界を奪へり。渠と戰ふもの多くあれども、渠に勝つもの一人もなし。惡魔には神に逆ふ之力あり。然して花は人を幻迷しむるの色香を以て世に歡び迎へられぬ。世に「惡魔の花」と云はゞ、墮落の力天下に敵なき爾の外に誰か其名に適ふも

で磨られたるを取りて、最と悔けに暫く凝視め、手巾を混して痛くも磨り、一倍白く剝ぐるに及びて心ならずも服の上に端しく列べ、轉び落つるを氣を焦ちて取りて上げたり。斯て掌裡の手巾を見るに、手環の汚染の移りてあれば、再び眉を整めたりしが順て口に含むで汚處を吸ひ、然る後皺を延べて正しく折り、是も手環の上に蒙せぬ。

候ち竹様に女性の足音聞えければ、學生は坐に復りア、渠も亡父の遺産の一個も冷笑ふ如き聲して、此暑に如何なれば障子を閉て、颯然として障子開き中年の女房入りて微笑めり。云ふまでもなく、渠は此裡の美人と稱ふべき相貌をば、皆悉く具有したりき。就中其眼の美しさは、凄味にあり、笑の巧なるは苦味にありき。

ヲ、三郎主歸られしよな。此度は久闊の歸省なれば、母御も如何に喜び玉はむ。や母御に遇はれし乎「否」さらば明日にも訪ひて喜び玉へ。僅に四五年の間、此曲中の繁華の一半を占めたる東陽樓の盛況に、目を驚かさぬものはあらず。此家も母御の競争を免れずして、二三年來漸く客跡少になり、今は唯空蟬の殻となりぬ御

のぞ高き樓妙なる庭及び艶かなる遊君よ嘗て爾より喜はされたる遺傳の吾血は既に冷たり。之を亡父の遺産として見るも、吾眼を樂しむるに足らず、嗟呼我は今万解の糞土の中に落來れるなり。百鬼の夜行に伍せるなり。嗟呼我天より地獄に墮落せるなり。

少女は茶と菓子を持ち来れり。淑かに其前に坐りて茶を吸みたり。渠は勿卒に飲み了りて起ち、床の間ある大草囊を提もて來り、封鎖を檢べ、開きしものゝ有や無やを問ひ、「誰も」と答へられたる後、封鎖を去りて徐ろに開き、無量の原書と講義錄とを書目に照して一一閱し、然る後底より浴衣と白帶とを取出で、再び書籍を收めて草囊を閉ぢ、鍵を下し、服脱ぎて浴衣に更へたり。其間團扇を把りて汗滴る郎君の顔を扇ぎつゝも、爲すべきとを待ち居し阿玉は、今服の脱かるゝを見て、直ちに疊、まむと手を着けしに忽ち郎君に制せられたり。止なむ、止なむ、拙なく疊みて皺つくるは宜しからず。御身は往て我が歸り來りしとを叔父御に告げよ。主人は今家に在さず、去らば叔母御に然か傳へよ。唯舞媛は再び客室の方より去れり。大學生は先づ大小の草囊を牀に復して猶ほ墨汁染みたる護謨の手環の剝ぐるま

身の家を斯く荒したると、言ひ解くべき様なけれど、敵は母御、妾にも姐御なれば是非もなし。——頓て五介主も歸らるへし、まづ悠々と休み玉へ。

斯く云ひて主婦は退りしが、障子を閉ずして去りければ、三郎は面を憤らして起

て閉め、坐に復りて一倍眞面目になり、妓女は不胎藥を飲みて石女となれるなるに阿國は遂に腰みてあるなり。人慾の孽既に蟠れる蛇の如く胎内に頭を擧げて

は女に心許されまじきぞ。

竹様は再び軋りて亂れ来る足音、書齋の前に止まりて、嘩嘩として前後を譲れり。裡には三郎栗然として身を震はしめ、玉藻、此花、白妙、吁口にするだに心の汚るゝ此輩にまで、一一接言さねばならぬ。我は、そも如何許の罪人ぞや。三個の妓女は直ちに入來て交る交る謁見したり。玉藻郎君歸省遊ばされし乎久しく彼地に在しまして變らせ玉ふともまさぬ乎。然此花久潤に歸らせ玉ひぬ。然白妙此頃の炎暑にさこそ疲れ玉ひけめ。然三個は袖もて口を掩ひ遁るが如くにして出でゆき、竹様の外にて、吹出し、續々として来る友を呼留め、玉藻止しね止しね自個の家へ纏き得ぬ癖に然然と主人振る青顔の憎さよ。此花止しぬ未來の主人とも思へば

こそ追従する効もあれ。さもなきに舌を耗すとも。白妙此方は人の頑弄物、彼方は天下の大學者、例へば凡夫と彌陀尊なり。頭を下げて拜みたりとて、領首かねが當然なるに然然と、領にかけても返辭を恵み玉ふとの有難さよ。甲、さらば其顔を見て置かば後日の談話の種にもなるへし。乙、ア、復た障子を閉めて居るよ。瘧病にてはなき乎。丙は思はず身顛してばや瘧病の傳染りし心地す。玉藻兎に角尋常一様のものにはあらず、往て見て來ね。と、書齋に向ひて領をあげ、然然。斯て一様の冷遇と冷罵の間に、二十餘個の妓女、七八個の童女の謁見了れば、最後に阿玉は晩餉の準備整ひたるとを告げ、郎君を食堂に誘ひゆけり。

## 第二 主室

主室には今叔父と甥と明燈を隔てて、相語れり。先づ此裡の見る所を云へば、一方に安置されたる机の高きは、此家の曲中に占得たる位地の高きを示し、壁に倚れる筆筒の大なるは、此裡に振へる權力の大なるを表はし、其釣手の多かるは、經濟の多端にして、縊密なるとを語り、四壁の額に聯ね懸けたる無數の帳簿の、西隅最も古色を帶び漸くに推移して、遂に東隅に及むで、全く新あるは詳かに西陽樓の紀

元と歴史とを告げ、然して其一隅に泰然として屹立せる老金庫は、此家の基礎の如何に鞏固なるやを誇れるなり。

主人は宛て短藁の彼方に坐りてあれば、其容貌風采は火殻を罩へる外殼に隠れ、薄絹の如き吹煙に巻かれて、遂に諦視すると能はず、唯其語る聲のみ聞えり。渠は云へり、御身か去秋大學に進まれしは、如に聞きし所なるが、修め玉ふ學科は法學なりや。否、我は工科を修めぬ。去らば西京には遂に一人の法學士なきや。否、吾友栗田は法學を擇びたり。御身は何故に法學を學ばれざるや。他に理由なし、唯我が性質に適せざれば、實に御身は小心にして思慮細かなる人なれば、工學こそ適當ならぬ。且つ當今は鐵道造船、礦山疏水等、實に工學士出世の時なり。御身歸途既に疏水を觀玉ひしや。否、未だ。是は中途種々世上の非難を受けしかども、今は全然落成して噴水機關も運轉し初たり。御身も一たび往て見られよ。京都ありてより、空前絶後の大觀なり。抑も工學士の懸けたる眼鏡は、如何なる天眼鏡ならは、斯かる異象を寫し出すや。我等が粗き眼に代へて御身の細かき眼を以てせば、一倍驚くべきものあらむ。聞く田邊工學士は今回疏水工事完成の功績を以て、博士の擇

みの裡にありと。我等も數度の宴會に於て、斯かる學者と席を同ふするの光榮を得にき。御身も頓て斯かる名士とこそはなり。玉はめ、勉め玉へや。三郎は冷笑に似たる微笑を發し。然なり。兎も角も勉めて見む。今宵は痛く疲れてあれば許し玉へ。

「いざ悠々と眠み玉」。

### 其三 書齋

漸く夜は深けて、淫樂正に酣なり。歌ふ聲彈く聲、喝采る聲、樓上樓下一齊に相混じて、他の一大繁奏の音樂を成せり。人間の舞遊ぶ調子に合せて、庭上には無情の噴水も飛び、漣波も立ち、游魚も跳れり。假山の松濤も亦聲を擧げて相和せり。

三郎は書齋に在りて未だ寝す。面上暗に幽愁の色を帶びて、獨り明燈に對ひて黙念してありしが、喧しき絃歌の聲に、幾度か腦中の結品を破碎せられ、耳を掩ひ頭を背けたれども、思想を叙づる能はざりしかば、喟然として嘆息せり。

渠は獨語して云へり。如何許騒しき夜よ。吾友等は皆清淨無塵の故郷に歸り、綠芋肥えたる田園を繞り、芳艸に牛羊を追ひ、黃犬を駆りて狡兎を丘陵に追ふるものも

あるべく父母兄弟一坐に團欒ひ親戚の情話を楽しむものもあるべく、王城の風俗人情を語りて少年少女を喜ばしむるものもあるべく、或は山人隱者を尋ねて清淡の興味を肆にするものもあるべし。實に此五十日の間、渠等が詩人的生涯の裡に故の快樂を享くるに代へて、唯一個此醜聲の裡に苦坐して心思を惱亂せらるゝ我はしも波濤の聲に腸を斷つ絶海孤島の流人の如し。忌はしい哉忌しい哉。此の忌はしき世を一日も離れんとせば、吾事一日も晚るべからず。——さるにても、我は叔父の心の測り難きに感ふ。大慄は忠に似たりと云ふ如く、相對して語る間は、深く我が爲に謀るものゝに似たれど、相隔て、察する時は、實に吾家を奪ふ奸賊の如くぞ見ゆる。嚮に渠と語りし時にも、渠は我が法學を修むるや否やを問ひ、工學を修むるを聞きては、西京よりは一人の法學士出でざるやとまでに憾みき。法律は正義の神なり。渠は天雄ヘラクルスの如く、絶峯の放洞に猛獅を持り、窮蹙の冥府に長蛇を捕へ、暴者の純繩より不幸の女王を解くものなり。渠は他の家を篡奪するが如き、奸者の頭に逆ふて擊ち來る鎌准なるに、叔母は何故に我が法律を學ばざるを遺憾とするや。然れども我が工學を學ぶとを聞けば、亦熱心に

我が學科の擇ひを贊し、當今工學士出世の時なりと云ひ、盛に疏水工事の偉功を説き、田邊工學士の名譽を稱し、よし鳴呼あるにもせよ、我に期するに他の疏水と田邊氏とを以てするは何故ぞ。渠は果して奸賊にはならざる乎。然れども強ちに忠者と云は、何故に疾く吾家を去らざる。三年以前我が丁年に達せし時、何故に我が請ふ所を拒みつる。然れども其は我が修學の身にして、且つ洋行の望あるが爲に、我に代はりて産業を管らむとの好意より出でし如くは觀えざりし乎。好意乎、惡意乎、大忠乎、大奸乎、大慾乎、そも亦無慾乎、心は顔より隠れてある乎。意志は言辭の外にある乎、抑も亦我は几人の意味なき言を解し過ぎて苦しめる乎。叔父觀すべき讀心術はなき乎。——あの足音は阿玉にあらずや。

阿玉は童女にして舞媛にあらざれど、其藝の妙なるより徃々親しき客の所望によりて舞ふとなるが、今宵は數番の席に時を移して、僅に深夜の一刻を得たり。渠は化裝舞衣の儘に、手に白紙に裏めるものを懷きて出来り、遙に燈火の丹く障子を照せるを認めて、嬉々書齋を訪れたり。

意の情未だ嘗て他を欺きたる手練なきのみならず、眞心あれば尼ると云ふ郎君の一言深く其丹底に彫られて、渠かため唯一の法律となれるあり。斯くて渠は此一事の過失の爲に惑より惑に沈みて、纏々たる情の波轉た動搖を加へつゝ遂に唇を纏ぢ頭を垂れて身を縮めたり。三郎も渠か心の太と淨く罪なく、呵責に遇ひて畏縮せるを見て憐れに思ひ、遽に面を柔げて御身が手に持てる紙中のものは何なるや。舞媛は僅に力を得て、美しき頬の下より低語にて踏襪と答へつゝ、三郎の前に出さんとすれども、手縮ぢて猶ほ出し得ず。三郎は「我に見せよ」とて自個取りて封を割き、一個一個子細に其表裏の經緯を視彩糸の配合を閲みし、猶ほ燈火に透して其粗密を揃べて巧にも編みつるよ。こは誰が編みつるものあるや。此一言の稱辭に、渠は溢るゝばかりの笑顔を擡げて、方式も精く知らず、手に任せて編み侍りぬ。御身が編みつるものありとや。唯「誰か爲に」誰か爲と云ふにもあらす、唯昔時補ひたる郎君の襪を模範にさせては我に穿けとて編みし乎。唯三郎は思はずも嘆息せり。忝なき御身の好意。——さるにても御身は何時編焉を習ひしや。舞媛愈嬉しさ加りて、太と微かの機にて侍りき。此春の暮、清水觀音に七

渠は忙しく三郎の傍に來りて坐り、郎君はまだ寐ずに在せし乎。今宵は疲れて在さむに。三郎は熟々阿玉の容を見て、御身こそ疲れてあらむに、此深夜にさる姿のまゝにして來るは、急げる所用のありてにや。妾は疾くも參るべかりしを、餘りに客の多くして心なくも深夜になりぬ。然らば御身自身の所用乎。阿玉は紅潮したる面に微笑を湛へて、唯「唯」と答へたるのみ。自身の所用にて來るものならば、面を改め衣を更へも來べきものぞ。妾の化裝の見苦しと宣ふにや。否見苦しと云ふにあらねど、「さらば此の舞衣も」固よりなり。賓客の前にこそ容は裝れ、家に在ては眞心だにあれば足るあり。

舞媛は始めて三郎か意を解したり。渠は其意を解すや否や、且つ恐れ且つ恥ぢて心惑へり。渠は其罪なき心より、唯郎君の爲に容れるものにてありき。渠は唯之を以て郎君の喜悦に入らむとのみ思ひて、之を以て譴責を受むとは少しも想はざりしあり。渠は今只管に思ひ煩ひて直ちに其室に走りて容を改めむ乎とも思ひしかども、然れども、若し呼留られて席に遣られむともやと恐れたり。猶ほ夜既に深けて、姿を改るの間なかりしと答へむとも思ひしかども、然れども渠が無心無

影 幻

(二二)

日間の祈願ありて朝とに詣でつるに、第五日の朝御堂にて美しき少女の踏襪を編むに逢ひてき。翌朝も亦逢ひければ不圖妾も編みてむと思ふ心起り、方式を詳く問い合わせ上にて毛糸編具を買ひて歸り、即日より編初てき。去れど踵の括約の甚た難く、編む手の少しも進まねば、今一度夫の少女に逢ふともやと満願の日、其まゝに持ゆきたるに嬉くも再會しければ、手より手に授られて、辛に編み習ひぬ。其後暇あることに編みたりし程に、今は十對餘にあり侍りき。さほどに慧巧き御身なりとは知らざりき。斯まで心盡せるものを我豈かは空に受くべき。——そもそも如何なる願ありて清水閣には詣でつる。舞媛は囁嚅たり。答辭なきが爲にはあらず、其答辭を面前に對ふると、何とあく恥かしき様思へばなり。去れど渠が罪なき心は、直ちに其口を開かしめたり。渠は微笑みて郎君の面を仰ぎ、當春四月、郎君は病はらせ玉はざりしや。三郎は太と訝り然なり、其頃熱を病みたりしかども、そは母御にだに告されば誰に知らるゝ由はあらず。否、妾は聞いて知り侍りき。その月九日に來ませし賓客、其由を告け玉ひしが、洒興の餘の言なりしかば、初めは戯言とのみ思ひつれども、若し實事にてあらむ時はと、其翌朝より平癒の祈願をか

西 阳 樓

(三二)

け侍りき、始めて此一對の襪を編みつる夜、満喜の餘得も眠らでありしが、若し無爲もなり玉はい、此踏襪も何にかせむと不圖思ひ回して、渠は遽に口噤れり。當時の悲哀の復活して、又た言ふと能はざりき。然れども眼中一滴の涙が吐きたる千万言にも盡し難き丹底の眞情は痛くも三郎を感じしなり。渠は阿玉を無智の美假面蒙るべきものとまで鄙みたれども、然れども此の滔々たる獨流の裡、渠は清淨無垢の小菩薩にてありしより。渠は阿玉を尋常一樣の舞媛とのみ思ひてしかども、然れども其實渠は善且つ忠なる女紅にてありしなり。渠は阿玉に真心を認めしかども、阿玉が渠に献げし真心は渠が要めし所よりも遙に勝りてありしらす。其形を以てすら郎君の歡情を得むと務めし舞媛の罪なき心を解したる時、渠は唯涙なりきては御身、さまでに我を思ひてありし乎。——觀世音すら感じ玉ひし御身の眞心に誰か動かぬものやあらむ。踏襪は——踏襪は我を藏めて大切に履くべきなり。御身の尊き手工に酬ゆべきもの今はなし。此扇渠は机上の扇を取り、此扇貴しとにはあらねど、富岳出日を書きてあり、報謝の微衷までに御

影

(四二)

身に譲らむ。——嗚呼我今日まで御身を知らさりき。——去れど夜は疾く深けぬ。  
我も痛く眠くなれり。今宵は室に退りて寐よ。  
此語を聞き此報謝を得たる阿玉の歡喜知るべきなり。渠は固より郎君を思ひた  
れども其心を越えて思ふものにはあらざりき。渠は唯郎君に侍る童女として、唯  
一個の小き婢として其主の喜悅に入らんと思ふ外はなかりき。然れども小事に  
忠ある真心の功、今其主の前に顯はれて、遂に大ひに用られむとすなり。渠が面の  
以前になかりし色に匂ひ、其眼の露より光りて見ゆるは、明かに以前になかりし  
天火の其情に熾れるとを語れるなり。然して此の「起れば滅えざる天火は、自個の  
野心より導火されしにあらずして、郎君が賜へる扇の爲に煽がれたるにてあり  
しなり。渠は今万仞の崖に上れるものゝ如く、絶恐絶喜の念に感たれて、魂飛ひ身  
震ひ、戰く手もて其靈き扇を受けつゝ、開き視むともせざりしなり。渠は其儘其坐  
に凝着し融解し、結晶して動かざらむとを願へり。然れども渠が天法なりける郎  
君の辭の故に、渠は恭しき暇を告げ身を起して退りたりしか、ツト障子に狹まれ  
る半面を回して、未だ臥床の取りてあらぬを視、全身を返し來りて他方の紙障を

西 阳 樓

(五二)

開き、夜具を取り出でいを延べたり。渠は今崖より下りて心安らきたるものゝ如  
く、歡情溢れて、雅歌を微吟みつゝ、蚊蠅を吊れり。

月の影さへかよひくる、

すゝしの蚊蠅はありながら、

君をまつ夜は、まつむしの、

身はよもすがらこがれつゝ、

よし蚊蠅の目のこまかくて、

すゞしき風はいらすども、

君に逢ふ夜のうれしさは、

夏のあつさもゆめにして、

吊り下りて再び郎君の前に坐り、眠み玉へとて遅々に起ち、舞衣の裳を掲げて欣  
々として心浮れ、天上に舞ひあがらむものゝ如くにして去れり。三郎も亦急はし  
くは障子を鎖ず、渠か形影を見送りつゝ、没影くありて太息せり。圖らざりき此場

裡に斯る真情の愛ありとは。我が冷かなる歸省の日を温め吾敵と戰ふ間疲れむ頭を休むるものは、御身の軟かなる情の外に何かある。さても眞心よ、我は爾を何物にか比へむ。爾は笑の溢る稚子乎。但は愛に充ちたる慈母平爾の涙の滴る時、惡魔も嗚咽び、鬼神も眼を濕すべし。山を抜き海を覆す項王も、虞姫の愛には敵ならで腹斷ちぬ。たゞひ我學士の衣を着、博士の冠を戴くとも、山を鑿ち海を乾かし、工業世界の天雄として、皇帝王者の公主に尙ぶ身になるとありとも、阿玉よ、御身の眞心の全能力にや敵すべき眞珠を求むる商賈は、尊き眞珠を看出す時、其の所有を賣盡しても之を買ふ。嗟呼此舞媛の眞珠を得むに大學生は物の員かは、吾生命は御身の物ぞ。

斯く云ひて遅々として頭を回し踏襪を革囊に納めぬ、時に絃歌は既に歎み深として夜は寂なり。遙に樓上を過てゆく太と軽き足音、天上の音樂の如くにして漸く遠く漸く微かになりゆけば、渠も亦眼中の活畫を護りて、舞媛が延べ置たる臥床に入れり。

第三 東陽樓

夜は明たり。西陽樓を照す朝日は、一倍の影を東陽樓に加へたり。朝來客の去り盡したる後、數多の妓女童女等或は嗽ぎ、或は浴み、或は朝餉の坐に圓變ひ、前夜の餘興を復習して客を笑ひ、友を笑ひ、世を笑ひ、遂に自身を笑ひつゝ、虛より虛に入る雜談に時を移せり。主室の裝飾は西陽樓に異同なけれど、帳簿も器具も皆新らしく、柱時計の針の旋回の速かるは、此家の家道の進みの如何に速かあるを語られり。結朝より机の前に帳簿を開みせる女房は、快樂の巷不老の宿の主なる故に、や、齡四十に垂むとすれども、容邑の衰へたりとも見えず、殊に渠は繁華第一の店や、主婦として、此曲中の女丈夫として、大學生の母として、太守の妾として、祇園全坊を擧げて羨み尊まぬものはあかりき。

久我三郎は今朝母を訪むとて、今しも東陽樓の門前に來れり。醜しい哉、吾母の第二の家は茲處なり。此間は官省も休暇なれば、太守も來りて栖るにあらずや。若し猶ほ母御の太守の閨に在さば如何せむや。と竊に裡を偷視ひて躊躇たり。主婦は帳簿を檢へ了りて微笑みつゝ快よき計算よ、此比例もて進みゆかば、夫の夫婦を

壓倒さむと遠くはあらじ。他の家を横奪ふ奸物の如何に悪運強くとも、凡夫隆に誇るども、やがて零落の時は來りて空屋となり、夫婦とも夜遁れ、西陽樓の吾手に復らむと掌を返すが如けむ。昨日今日三郎も歸省すれば渠にも語りて喜ばせむ。家婢は三郎の入來を告げぬ。三郎が來れりとや、疾ぐこゝに呼入よ。と自身も起て三郎を迎へて坐らしめ、久しくは待ちしかども、思ひよりは速かりき。はや試験も済み、得業式も終りて平。さても試験の成績は、今年も亦優等とや。栗田の君は、君も同しく優等なりとや。そは眞個に可祝となり。——さるにても三年見されば太ど變り、色も悪く姿さへ萎れしは、勉強の所勞にや、病に罹りしとはあらずや。此春熱を患ひしかども、輕かりければ告さりき。苟且にも病と云へば費用も要るを、如何に凌き玉ひつる。そは月費中よりの貯金にて餘ありき。御身が思慮の密なるは母の爲には嬉しかれども、朋友の交際もあるべし。吝嗇して譏られ玉ひそ。そは宣ふまでもなし。——此間母御は微恙も在さりしか。妾はいつも健全にて風邪だにも感しとなし。そは何よりの幸福なり。吾身は日夜母御のとのみ思ひてありき。

少焉して三郎は語を繼ぎ、母御よ。吾身此度の歸省一は叔父より家を受けむとの爲にて侍るが、母御は如何に思ひ玉ふや。母は待設けぬ容子にて、そは何爲に、噫、御身は彼家の疾く奪はれつると未だ知らずや。三郎は愕然として「吾家の奪はれたり」と平、さては豫想に違はざりけり、奪はれたりとまでは思はざりしに。——若し奪はれてあるものならば、愈恢復すべき責任あるにあらずや。母も恢復さずと云はず。されど表面より事を啓くは太と危ふし。母が此家を起しつるも、渠等の裏面を搔かむとこそ思へ。そは餘りに緩慢き手段にはあらずや。否決して緩慢きとはあらず。と嚮を檢べし帳簿を取出て、之を三郎か前に開き、是を見られよ。我家の好運はや、彼家を凌げるなり。渠等を壓倒さむと遠きにあらず。と、猶ほ他の帳簿と僅少なり。御身が大學を卒へ玉ふにも猶ほ一年あり。洋行の日を三年とするも併せて四年の歳華あり。四年の日子短きに似たれど、其間に腹まさりし子は生れ、乳兒は懷を離れ童子は少年となり。御身も學士より博士の位に進み玉はむ。さらば毎錢も子錢を生み、勉く家には富も倍すべし。斯くて御身の歸朝し玉はむ日に

は、亡父の遺業に倍する産業に併せて彼家をも得玉ふべし。母豈空妄き言を言むや誓ても成就しなむ。三郎はなほ悦ぶ色なく、吾身の爲に然まで心を盡したび玉はむと謝するに餘れど、御身は我を疑ひ玉ふ乎否、豈て疑ひまつらむ。若し吾言を疑ひ玉はずば、兎角の辭なき理なり。然なり固より母御を疑はねども、彼家だに恢復さば、左様に身を苦しめ玉はずとも宜きに否とよ吾身は悪人の垢に鑄たる財一錢だに欲くはあらず。吾身は母御が父御の遺業を棄て、徒に身を苦しめ玉ふとを心なくこそ思ふなれ。

母は遽に容を改め愚なとを言はるゝよ。善く聞き玉へ、人は勞く爲に生れ勞く爲に活きてあるあり。若し休まむとならば死るに如かじ。父は勞きて積たる財を子に分てば、子は勞て殖せし富を孫に傳へ、孫も亦其子の爲にぞ勞く、人間代々窮りなく、人は殖え家は倍すとも、世の裕かに維持せらるゝは人々自ら勞く故なり。御身なくば休みもせめ、去りながら學期長かる大學を卒業せさせ、費用多き外國にまで子を遣らむと思ふほどの母にして、休むべき様やはある。昔より愛しき子の出世の爲には、生命を棄たる仁田四郎が母もあり、三浦之助が母もあり。縦ひ雪深き山の奥にも、凍ゆる子には柴も茹るべく、虎狼の住むる巣にも、病める子には藥も壙るべし。母は斯ばかり苦痛を嘗ても子を世に出さむとこそ思へ。此心を酌み玉はい、將來の望を大くして、修業の心を勵ますべきに、圖らざりき休めと諫め玉はむとは。三郎は頭を垂れて默聽しつゝ、眼を濕し、さても吾身は如何にかすべき。母御の恩の加はるゝほど、吾身の憂彌倍すなり。——哺母御、母御を然のみ苦しめて安く遊ぶ不孝の罪、世人は何んとか云はむ。

母は一倍聲を強くし、やよ三郎御身今日は如何なればかく愚なるぞや。母は書を讀ねば詳さに知らねど、孝行とは親の意に背くとをや稱へる。盜賊だに其子を悪く育ねを見て、世の親の其子に屬たる望の大小をも知り玉へ。御身には今父なし、御身を育つるは母が責任なり。若し御身無用の人となりて終らば、父なき故にと嘲れむ。世の口の恐るべき所は茲處なり。御身も亦知り玉ふべし。夫の田邊工學士は大學を卒業せられ、多年米國にも遊ばれて、少からぬ學者の裡より擇ばれて今太守の婿となり、以前にもなき疏水工事の大業を完成し玉へり。世人は水通へども運ぶ貨物なく、噴水機關は運轉すれども、一個の事業も起らざれば疏水を

無用の長物なりと譏れど、政府には君の功績を愛で、博士の位號を賜るべしと聞  
くにはあらずや。母は御身が君にも勝りて有用の人となり、有用の事業を成就し  
玉はむとをこそ祈りつるに思ふも似ぬ心の弱さよ。大凡世に牝鷄休むて雛の育  
ちし例を聞かす。御身の稱る、孝行は妓女歌姫舞媛など、世に在て効なき女子の  
業なり。母は數多の妓女を役へど、御身を其類にせむとは欲はず。

三郎は比もなき慈愛と呵責の能辨に説伏られて無言なると多時なりしが、辛し  
て再び自ら歎息し、母御よ大凡世の大學生の母は、一人として自由の身ならぬは  
あらず。母は遙り自由の身と云はるゝ平吾身は太と自由の身なり。西陽樓を失ひ  
たれども街に食物を乞ふにもあらず、此家を起してより以前にも倍したる婢僕  
を役ひ、收入は漸次に殖え、負債ははや皆無ならむとせり。御身に給る修行の費も、  
一個月だけに滞らしたることもなし。縱ひ遠國に遊び玉ふとも餘人の力を藉るに  
要はぬ。母が今日の好運を誰か不自由の身と云はむ。人は皆吾身を羨むでこそあ  
れ。否とよ、母御の如く憂苦を見玉ふ人はあらじとこそ云ふなれ。母は怫然として  
眼を瞬り、御身は母が憂苦を見る。と幾度も云ひ玉へり。抑も母に如何ばかりの憂

若ありや。私は聞く子を修業せしむる母は、或は氷を敲ひて衣を洗濯、或は雨洩  
る宿に裁縫ひ、或は寒夜に砧を擣てりと、今身を投げて西陣の機をも織らず、鹽を  
運び衣を擣つがとき賤しき業をも執らず。唯々坐上に帳簿を記すればかりの業を、  
御身は何爲に斯くまで憂しと謂はるゝぞ。

三郎ははや堪ゆる能はず心あふれて、皇天后土よ世にも恥べき貯妾の身にあり  
ながら、賤しからず憂からずとは何の心ぞ。如何に曲中の灑に染みたりとて、斯ば  
かりの義理の辯へ難きとやはある。畢竟は母御の血猶ほ熱く、煩惱の炎猶ほ焰え  
てあればぞ。嗟乎富岳の雪を掬り來りて其情を冷さま欲し、霜を呼んで其髪を白  
くせま欲し、齡と老とを曳き來つて其生々しき面と手とを枯さま欲しと、齒を噛  
て身を震ひ、涙は膝に迸れり、無爲き世や。我が世道を辨ふるは、皆是母の賜物な  
り。母の賜物を以て母を責む、我は其是か非かを知らず。然れども黙すれば罪愈深  
し、嗚呼神願くば我を顧み、我が言ふ所を盡させ玉へ。斯て再び心を決して母に向  
ひ、母御よ、御身は此騒しき巷を離れて、世を閑地に避むとは思はずや、春来れば花  
を見、秋去れば紅葉を見、月を賞め、雪を愛で、時には父御の墓をも訪ひ、世を安樂に

過さむとは欲さずや。

母は愕然として色を變へ抑も御身は我を尼になさむと欲ひ玉ふ乎。渠は今子の意を解し過ぐるまで善く解して遽に面媚るか如し。三郎も意外の答辭に懼然として恐怖を懷き否さる意には侍らじと註釋んとすれど母は聽かず。否否是まで屢解し難きとを復し言ひ玉ひしは定めて尼になれとの事にぞあらむ。御身は有識る人なれば只管に今の吾身を咎め王ふも理なれど世道は左様に直きものにはあらじ。昔より名ある婦人にして側室となりしもの其例多し。常盤御前は平相國の閨に侍り、巴御前は和田が枕席に供はれり、清盛は亡夫の深仇、義盛は當の對敵なり、若し子の生命を助けむ爲に共に活きざる敵にすら仕ふべくは御身の爲には吾家を奪ふ五介主にも添むに添はれぬ理はあらじ。況て宿怨なきのみならず弱きを助け頼なきを蔭ひ、殊に御身の前途にまで力を藉さむと宣ふほどの恩人をや。若し今は昔に異なりと云は、幾十万と云ふ府民の模範とも立ち玉ふべき太守の身にして、側室を蓄き玉ふとあるべからず。妾を責むとならば先づ太守の君より責め玉へ。貞女兩夫に見ずとは妾も幼時より聞てあり、固より今日の身

を屑しとは思はねども、是も御身あるが故なり。御身だに世に出で玉は、母か世を連れむと疾くより期せり。若し一日も遠く母を尼になさむとなれば、一日も遠く御身の業を卒へ玉ふべし。——さりながら久潤に歸り玉ひしとにしあれば、母は唯興味き話柄を聞くのみ思ひつるに、圖らざりき種々の言もて母が心を斯くまで苦しめ玉はむとはと云ふ聲漸く低くありて、面も心も羞味を帶て軟らきければ、三郎も今は自個の意衷の相通せしを満足せしが、渠は猶ほ此機に乗せしものゝ如く吾身の爲め然ほどに心を盡し賜はむとなれば、亡父の家を恢復さむと欲ふ吾志を助けむとは思さずや。

母は少焉無言にして三郎が面を熟々見て太息を發き、左様に遺憾となれば、兎も角も試みられよ。さりながら容易ならぬ事と思へば構へて心し玉ふべし。御身は叔父を如何ある人と視玉ふや。叔父は恐るべき人ならず、恐るべきは阿國にこそあれ。吾身は今日まで叔父の心の察り難きに苦みたるに、御身はまた阿國を恐るべしと宣ふ乎。然なり。實に御身の齡にては、未だ婦女の恐るべきをば知り玉ふまじ。

## 影 幻

阿貞は氣色を恢復して母は能く阿國を知りぬ。妓女は素より賓客の弄具なれど渠は却て賓客を弄具せり。渠が買はれて來りし初は、一様の婦女と見えしも、有ゆる男子の其手中に落ち、其足前に仆るゝを見、殊に虎狼より恐れられたる大川洪然の惡代言すら、膽くも寢處の猫となるを見て、忽ち浮虛の念を生じ、世に懼るべきものあく爲し能はざるとなしと謂へり。斯る婦女にして心弱き五介主の妻となりて、家の事を與り知らむに、豈でか手を拱みて過べき。婦女一たび良心の鍵を斷つ時は、忽ちにして夜刃となり、欺かむとすれば輒く欺き奪ばむとすれば事あく奪ひ殺さむと思ふ時にも猶豫なく殺すなり。因果の環は指にあれども、思ひ立つては他を顧る暇はあらず。況て事顯はれむ時の爲に、大川洪然と云ふ後援すらある渠をや。

三郎は呆然として自ら喪ひ吾身も阿國を尋常ならぬ女とは思ひしかども、左様に大怛なる女なりとは、微しも知らぬことなりき。と始めて夢の覺めたる如く、その上渠今胎みてあるなり。阿貞は愈得意になり然あり。渠は今胎みてあるなり。渠が胎めるは猶ほ蝮の胎めるが如く、其の生産の前には御身を喰ますむは止まざ

るべし。渠は既に御身を唇の上に置けり、動かば喰まむと待居るなり。進むて危きに近むよりは、退て安然ならむに如かず。益なきとを語らむより問ふべきとの多くあり、乞玉へ奥室に。母子は相伴ひて奥室に入れり。

## 第四 西陽樓

## 其一 書齋

三郎が東陽樓より歸りし時日は既に暮てありき。渠は今書齋に在り、舞媛は其傍に侍れり。渠は暫時に支れてありけるが、頓て阿玉に向ひて云へり。御身に今問ふべきとあり、半時間ほどの猶豫はなきや。阿玉は微笑溢れたる聲もて、妾は今宵頭痛のため暇を乞ひてあれば、明朝まで郎君の傍に侍りてあるも不可からず。實にそは好機なり。他事にはあらず。叔父夫婦は我がとをは如何に云ふや。如何に云ふやと宣ふは。我を嫌ひてあるにはあらずや。さればなり。郎君のとに就き、主人は宣ふ所なけれど、主婦は太と忌まれてあるにや。機あるごとに悪く宣ひ、殊に郎君の歸らせ玉ひしより、一倍氣色の變りてあり。昨日今日密々相語らふ容子は見えずや。然か宣へは其事あり。今日郎君の出で玉ひし後にも、亭午過ぐる頃まで密議

し玉ふ様なりき。昨夜此室より退る頃も半宵を過ぎてありしかども、主室には猶ほ潜々として主婦の聲しき御身は渠等が語る所を偷聽かざりし平。微しも聞く所侍らず。御身にそを聽取る機はなきや。我が爲に其を聞きてむや。舞媛は驚きて郎君の顔を視てありしが、敢て何故と得も問はず、また敢て拒む氣色もなく、機とては侍らねど郎君の爲とならば。

斯く答へたれど、一抹の愁烟渠が面を掩ひ來り、痛く思ひ煩ふ様あり。少時して語を繼げり、さるにても若し看破られむには如何すべき是までの事を考がふれば太と怖ろしくこそ侍れ。是までの事とは、舞媛は口を噤みたるまゝ敢て言はず。面を覗ふして低頭きたり。三郎は氣を焦ちて何ぞ是までの事と云へるは。再び問はれて今は隠すべくもなければ渠は僅に頭を揚げて、太と恥しきとなれど、此春より主人は妾に幾回となく怪しき言を宣ひ、往々衣を拉へ玉ふとすらあり。辛くも阿責せられ、或時はあらぬ罪を衣せられ、或時は他人の誤失の爲に詰られ掌にて頬を打たれ、髪を牽かれ、泣て寐ぬ夜も幾度ぞ。明輩は少かられど、此等の人は皆主

婦の意を承けて郎君を譲るが裡に、妾一個反ける故に斯かる時に慰るものとては一人もなく、苦しむ妾を心ちよげに喜び見るのみ。平生すら斯くも憂かるに況て秘語り玉ふ大事を偷聽ふとの顯れもせば、渠は語を了らすして垂頭けり。一滴の玉露指頭に落たり。默聽き居りし三郎は痛く感たれて洪嘆し、我名の爲に然ほどに酷く懲されたりし御身を、此上煩さまる様もありし。宜し心をな痛め玉ひそ。他に猶ほ好方便あるべきなり。斯く主婦に憎まれ朋友に除かれては到底此家に仕めたるべしとも覺えず。王城には紅葉館あり、此地の舞媛も多しと聞きぬ。あはれ妾をも王城に伴ひたび玉は、如何許の恩情ならむ。三郎は憫然の念に堪えず、御身は何時まで斯る賤業に世を過さむと欲ふや。好む藝とには侍らねど、一旦斯る身になり侍りては、此外に故郷の祖母御を養ふべき方便も侍らず。學問せむとの意はなきや。舞媛は顔丹らめ、學問せよと宣ふ平、妾の身分に應はぬのみかば、此家に來ます賓客、一人も女學生をよく稱ひ玉はず、學問ある女子は縁疎しとのみ聞き侍れば。大學生は愈憐み可憐のものよ、理由なき言を信なりと思ひつる乎、然らば裁縫ふ業は如何。裁縫ふ業は妾の太と好む所なれども、一二年學びたりとて、祖

母御を養ひ得べしとも覺え侍らす。

三郎は且つ嘆じ且つ痛み深く思念する者の如く、燈火を凝視りてありしが、渠は今容を改めて語を低くし、喃阿玉、我が言ふ所を諦聽よ。御身も既に知る如く、此家は吾家なるに、我が幼りし故叔父夫婦に一時管けたるに、渠等は今此家を奪はむとし、其企図既に熟したり。其は我が疾く洞察ける所にして、叔母が我を蛇蝎の如くに惡むも亦是故なり。母御は既に此家を棄て、且つ我を諫め玉ひしかども、我は斷じて恢復さむ意を決めぬ。此望を遂げだにせば、御身にも學問裁縫好む隨に修めしむべく、故郷の祖母御も呼び迎へて養はむと難からず。誼する所其端緒を啓くと、焼眉の急なり。我一たび事を起さば渠等が其密議を改めむは太とのなり。御身若し心を配りて其消息を得ば、我が益即ち御身の益なり。如何力を協せずや。舞媛は始終諦聽きて身を顛はせしが、是に至りて憚く胸を自ら抑へ。そは畏ろしき企謀なり。昨夜より今日の密議も定めて此の事にてこそありけめ。實に畏ろしき圖謀なり。而して郎君は眞個に妾を憐み玉ふや。問ふまでもあきどよ。祖母御をも。固よりなり。郎君眞個に妾等二個を憐ませ玉はい。如何なる難業苦業も厭は

じ。猶ほ童女の妾に侍れば、太と駄かなくは侍れど、宣ふごとく試みてむよし誤つて看破られ、縛られ、責られ、笞たるゝとも、郎君の命なりとはよも首實じ。さて雄げに諾ひたり。斯ては一時も速さぞ宜き。聞け、今九時の鐘撃つなり。恐らく密議の頃なるべし。來疾く往くべし。若し要領を得ば直に來りて我に告げよ。唯舞媛は響く胸を手もて壓へて出むとす。三郎は呼び返して足音高し、歩まずして滑らしゆくべし。唯大恒なる童女の影舞曲の態度を以て徐々に主室に向ひて進めり。

## 其二 主室

八月十四日は最も暑き日にありき。晚景より風は止み、屋上の瓦未だ冷えず、氣の蒸すと夜に入りても堪え難かりき。然れども主室には今宵ばかり緊くも障子を閉め、呼吸ほどの微吹も出しませ、牢の如く密鎖して火影の薄く闇く照せる下に、唇より壺を放ちて舌鼓てる男と。團扇を探りて潛に扇ぐ女とあり。其男は年齢三十四五と見え、團然として形肥えたり。其鷹揚なる所は大恒なるが如くも見ゆれど、其顔上一線の苦味なきが故に微しも悪相を顯はさず。且つ遠く視れば豊けき頬の英雄相に似てあれど、就て視れば顔筋緩みて痴なるに似たり。若し此人に

して其心淵の測り難きものありとせば、其鷹揚なる額に恒に安心の意顯はれ、且つ斯の如き人の常として概して其心平らかに、其の唇も亦囁らざるより来る推測なるべし。是は即ち五介と阿國なり。密議は少時途断れたり、唯其坐前の壇のみ大いに氣焰を吐かむとするものゝ如く、天井に向ひて底深き口を開けり。既にして阿國は云ふ三千金の子錢の外に收るべからずとは、さても男性の心の無爲さよ。管理者の責任如何なりとも母錢たに返せは足る。されば其の殖えたる三千金を收るは固より當然の事。猶ほ自個の所有を收るに同しく、微しも餘分なるとはあらず。熟考へ見玉ふへし。管理者に俸金なしと云ふとも此五年の間、自個の經營を全く廢て、此の家に身を投たる我等、縱ひ俸金を稱はずとも相當の報酬を受くべきは尋常普通の理ならずや。今其俸金ならぬ報酬をば最も低く三十金に算りても、一個年にして四百金、五個年にして二千金、此母錢に其より生する子錢を加へなば三千金にも餘るべし。三千金の報酬と殖えたる所の三千金とは、公然に握るべきものなり。今や其一千を減じて五千にして満足せむとする、好意を渠等は宜しく謝すべきものなり。委托金を此儘にして還すは恰も掌中の美菓を棄る

が如し。諺にも掌にある間に食へと云はずや。握るべき時に握り置かずは、帳簿は一たび他に移らば、齒を噛むて悔ども及ばじ。

五介は數度嘆息吐きて、罪深きとを云ひ玉ひそ。母錢の生みたる子錢こそ、我が俸金なれ、報酬なれ。此外には一錢も取るべき理なし。三郎が屢請ひしを今日まで還延して家を譲らざりしとも、唯此子錢を殖さむ爲のみ、万一千餘分に取らむとするも、帳簿は商家の明鏡なり。世人の目を味し得とも明鏡に對して通るべき様はなし。「さらば其帳簿をは視し玉へ」。

阿國は五介が手より帳簿を受けて、貞貞具に檢べて遽に得意の色を顯はし、晴暉樓より入れる二千金は、入焉のみ記して出焉の遣ちたるは如何なる故にや。五介は怪しみ「否、遣ちたるとはあるべからず、若し遣ちてあらば、そは御身の誤まりなり。嘗て御身に命じたるとを我は明らかに記憶せり。吾身にとか否、御身の命し玉ひしは松風樓の五百金のみ。其他は妾の知る所にあらず。」我は確に誰にか命して記さしめしが、御身ならずば儀助なりけむ。去らば我に。五介は帳簿を子細に閲したれども、遂に其を看出すと能はず、直ちに儀助を呼ばむとするを、阿國は止め、團

扇を以て燈火を掩ひ、二個の顔を闇中に合はせて耳語き。是こそ天の興ふる圖謀の種子なれ。五介は竦然として阿國を見、晴暉樓の主人あり、豈でさるとの能へき。憂ひ玉ひそ、券に書き玉は、其の餘は妾に成算あり。今世は法官の目盲き舊時と異なり、輒く欺くべくもあらず。否とよ確かに成就せむ。御身は唯安然にして其時を待ち玉へは足るのみ。事一たびは成りもすべし。然れども成るよりも顯はれ易きは非望の性なり。若し顯はれたらむ時には、御身は我を如何せむと欲ひ玉ふや。左のみ心を痛め玉ふな事は例も顯れむことを恐るゝ故に顯はるのみ。如何なる實據の舉り來るとも、唯忍びて情と色と辭とだに變へ玉はずば事遂に成るべきなり。五介は猶ほ手を拱むて頭を垂れ應ふる所あらざりければ、妻は再び「妾嚮に醫師に聞きぬ。外國には神經を以て囚人を死しむる法ありと。是は豫め其囚人に脈を断ち血を出せば、血盡きて生命絶ゆるとを告げ置き、然る後密閉りたる室の小孔より其隻手を外に出して、皮膚と同し溫度の湯を噴く管の下に置き、然る後針もて脈を刺すと共に、管の湯を脈の上より滴らしむれば、黙々音して垂るゝ温湯を囚人は自個の生血なりと誤認ひ、頓て其音の漸くに漸く微なるに従ひ漸く心遠くなり、一定の時間の裡に音絶ゆれば氣も亦盡くと。黒子ばかりの肉も傷らず、一點の血だに洩さず、生たるまゝ吾心を以て吾身を殺すは腹割つて死ぬより遙に愚痴なれど、世間の事吾心に傷れぬもの幾何もなし、されば何事も唯忍耐し玉へ、忍耐は所有ゆる企圖を緊束るの緒なり。

五介は猶ほも恐れ疑ひ、さるにても御身に如何なる方便ありや。阿國は答へて「私は今より定めて告げ難し。さりながら二千金の半の半も割き玉は可し。世人の云へる如く、今は黃金時代なり、黃金には敵あらず。黃金を惜はすれば敵も友、友も僕となる世なり。黄金なければ公卿華族も貧民となる世あり。晴暉樓は固より商賈法官も亦木石ならずば、豈て黃金に情なからむ。傍観て居玉へ、御身の今日恐れ玉ふ世間の明日は如何に御身の前に媚るかを。五介は面を仰き且つ俯し少焉鳴呼、と嘆息つきしか、遂に力なき調子にて、去らば兎も角も御身の思ふまゝに爲玉へ。」

阿國は五介を説伏せぬ。渠は悽き笑顔を燈火に照さしめつゝ、其懷中より折りたる一頁の書物を出したり。渠は其を徐ろに五介が前に叙へ、御身既に五千金を握

り玉へり。餘の五千金は妾取りて呈らせむ。此券を見玉ふべし。五介は券を取て表面より裏面を瞥見し、愕然として面を青くし、是は吾亡兄の券にして、此家を典して五千金を大川より、夫の恐るべし大川洪然より借りたるものなり。抑も兄は如何にして斯かる負債を爲したるぞ、斯ばかりの巨額の金を帳簿に明記せざるは——ア、ア、是れは誰が斯くも巧みに偽筆つる。——我是眞個に驚かされぬ、抑も誰か斯かる券を書きしや、静に爲玉へ、一藏主の筆跡とだに見玉は、其他は尋ね玉ふに要はず。去らば御身が屢々大川許に出入せしも此券の爲めなりし乎。阿國は間さず實に實に是迄甘じて御身の疑を受けしも御身を利せむと思へはなりき。五介は天を仰て青息吹き少時は口も得開かざりき。阿國は徐に燐を取りて壺に酌み、今一杯嘗み玉へ、若し此葡萄酒旨くば今より紫泉堂のを用ひむ。五介は一氣に半を傾け、壺を揚けて燈火に透して其色を見、猶ほ飲盡して舌を鼓しことに佳し。爾後此酒を用ふべし。餘りに佳ければ今一杯を酌みてよ。幾杯なりとも飲み玉へ、猶ほ餘に兩壺ありと復ひ酌むで壺に満しぬ。五介は再び壺を擧げて一呼しさては御身は此家を擧げて奪はむとの心算なりや。否とよ妾に決してさる悪心あ

らず、されども御身の手にて五千金を得玉ひ、此券に五千金を返さば、此家の空くなるも止あき事なり。此券の爲に、御身は大川洪然に如何なる契約を爲しつるや。夫の人は一錢だに求むる所なし。否渠が度なき慾心、金錢に求むる所なきは、是れ大ひに御身に求むる所あるか爲ならむ。阿國は歯を出して苦笑ひし。娼妓には娼妓の務あり、妻には妻の操あり、御身に由て懷胎まで爲つる妾を、今猶ほ妓女と思ひ玉ふや。苟且にもさる醜べき辭を妾に負しめ玉ふ前に、御身先づ阿玉をば斷念し玉ふべし。情なき言よ。五介は頭打たれし猫の如く、悒爾として顔を下向け、暫時は酒氣を呼吸したり。渠は僅に生氣なき面を擧げて、若し礎石より此家を握は、三郎を奈何せむ。渠は亡兄の子、此家の主なり。然なり、さりながら茲年ハはや一藏主の第五年の靈祭なり。渠は大學生にあらずや。されど御身工學生と宣はさりしや、工學生は土木師の長と云ふのみ法律とは縁遠かり。よし渠恐るゝに足らずとすとも、夫の女丈夫必らず激甚しく復仇せずむば止まし。姐御の我等と競争し玉ふは、既に此家を棄てられたればなり、此上は唯三郎の魂を消せば足る。縱ひ姐御其子の爲に報いむとし玉ふも、姐御は唯氣象こそ剛けれ意外に智慧のなき人也。

姐御の頼み玉はむは唯法庭あるのみ。法庭には我等の爲に大川洪然あり、微しも忍るべき所はあらじ。況て豫かじめ法官の口に黄金の轡を鉗むるをや。五介は壺飲ほしたる儘猶ほ黙して答えされは、阿國は痛く心を焦ち、左様に心の小さくして、如何にして其三千金を握らむと爲玉ふ。管理者の責任は損すれば自ら補ひ益すとも自ら取ると能ずと固く云ひつゝ、猶ほ其子錢の握るべくは母錢は何故握るべからずや。三千金の爲に帳簿の矯らるべきものならば、五千金の爲に爾か爲し得ざる理ありや。母錢と子錢と握るべからざるは一なれども額に非常の差あるのみかは、子錢を除くも母錢に傷るとなければ、管理者たるの口實も亦あるなり。愚かなとを宣ふよ、是れ猶ほ鶏を假りて卵を倫み、然して鶏を傷けずと云ふに均し。一個の卵を盜むも鶏を擧げて盜むも、同しく盜の罪を免れす。子錢、母錢握るに異なる理はなきに、御身は自ら三千金を握りて是は握りて可きものなりと宣ひ、猶ほ二千金を勧れば、如何にもせよと宣へり、斯くて御身は既に五千金を握り玉へり、前の五千金をば握るべしと云ひ、後の五千金をば握るべからずと宣ふは何故ぞや。後の五千金後れたるが故に不可とならば、兩方を前後に取り代

へなば可と宣ふにや。五介は手から酌むで満爵を傾け勇氣を鼓し、御身は我を如何なる黒影裡に曳落さんと爲玉ふや。五千金すら吾心を傷むるもの、況て此家を擧げむとするをや。阿國は焦ちて胎に手を當て聲銳く御身此處を見玉ふへし妾懷胎すれば御身は唯何時胎みしや。何時胎みしやと懷胎の日を尋ね玉ふのみあれど、妾は既に生誕たる者と思ひ、其襁褓より養育のことを思ひ、男兒ならば其娶べき婦を思ひ、譲るべき財産を計り、女兒ならば其の配すべき婿を思ひ、其衣裳調度を數へ、又其子より孫の世までも思ひて煩ふ、假令ば今良く育ちて智慧もあり學問もありて三郎が齡に達したる子を持てりとせむに、三郎が今得むと欲へる家を其子は得むとは欲ふまじき平三郎が思ひ立ちたる洋行を、其子は思ひ立まじき平御身は此胎内の子を未見ぬ三郎、小き三郎とは思さずや。若し三郎よりも賢からば、その賢きがために一倍出世の料を要せむ。若し三郎より愚かなれば、その愚かなるが爲に一倍修業の費を要せむ、兎ても角ても此子の爲に三郎が得む程の財を備へ置では能ふまじ。女人の身にして種々畏るべき罪を作るも是故なり。鳥さへも、子を産むに前に巣を作るの智慧あり、御身若し生れぬ間に此子の

爲に慮り玉はずば、生れて後には千回百回悔い玉ふとも、一錢にだに値ひせざるべし。

葡萄酒の効顯はれたり。阿國は其力を藉りて五介の心を寛くせむが爲に勧め、五介は恐く其力を藉りて以て阿國に抗らむと欲ひならむも、五介が酒を觀ると阿國に及ばず、酒は遂に阿國の腹心を五介の腹心に注ぎ。渠は今輝き來れる面を擧げ、兩三度身を左右に搖り、宛然野流の大海上に出たる心地しつゝ遙に兩の眼を呼りて阿國を遮り、宜しはや止ね。吾意定まれり。大恒に事を行ふべし。世は一時一時の世なり。今日だに善くは明日は明日に放住せむのみ。宣し御身の言の如くせむ。阿國は始めて圓満なる嬌笑を湛え、吾身も胎兒も、大川のものなりと知らず好く躍る人形、第二の企圖に上る第一の段階たるに適すれば斯く適するものぞ。斯くして同黨に誘い置きだにすれば、後にて追ふとも追はぬとも意の如なり。と胸に秘めつゝ、斯てこそ心安く手も下さめよしこれが爲に如何に心を苦むるとあらども、皆是れ御身を利せむとなれば、御身も心して唇より洩し玉ふな。今宵にも三郎が來りて請はり、如是如是に言ひ玉へ。と、頭を併せて耳語きたる後、斯く云

ふとも渠猶ほ聽かずば、一氣に呵り懲し玉へ。五介は得々首肯したり。斯くて阿國は再び起ち、他の一壇を持來りて五介に勧めぬ嚮に明燈の周圍に羽きたる一對の蛾の、火殻の上端より火影を打ちしば此時なりき。阿國は直ちに團扇を揚げて蛾を撃ちたり。蛾落ちて燈火消え、月影の満てる障子に、一個の全身像見えたり。五介は愕然看よ夫の影を。辭の下に阿國は蹶て起ち、障子を開き、遁れあへぬ小き頸を緊と攫めり。像は戰きつゝ身を縮めたり。

阿國は低く銳き聲にて、阿玉は何方に茲處には立ちつる。阿玉は唇顫ひつゝ否妾は今茲處を過むとするのみ。否、そは虛言あり、竹櫻を歩く者足音なきとやはある。「唯今月影を見て留りしのみ」咄と阿國は書齋の方を一顧して、一倍低く急たる聲にて咄此間者、猶ほ我を欺かむと思ひ居るや、誰が汝を牒ばせたる。汝は孰れの室より來れる。否、唯月を見たるのみ。孰れの室も來れるぞ。實に阿玉は猶ほ童女なり。渠は斯く速かに使命を果し得むと思はざりしのみならず、亦斯く速かに捕へられんとを想はざりしが故に、遁辭、答案固より豫備する所なかりしかば、是まで顛ひて語を成さりし唇、忽ち最後の詰問に塞がれり。憎むべき子よ、乞來よ、歩め

阿玉は頸を櫻れしまゝ、或は打れつ、或は蹶られつ、獵人に捕はれし兎の如く曳かれゆけり。五介は渠を助む爲に屢頭を出したれども、陳ぶべき辭なきに窮し、三郎も倫聞きて齒を噛めども爲む術なく、唯阿國の復るを待ちて舞媛の爲に酬いむと思ふのみ。

## 其三 主室

五介か再び燈火を點け、帳簿と券を藏むる間に、阿國は主室に復り来れり。五介は問へり。渠は我等の秘密を偷聽きたるにや。阿國は答へて「渠は童女にも似ず太と坦太く、如何に責るとも實を首かねば、固く其室に錮め置きたり」。左ほどに情なく待はずとも。否とよ、渠が三郎の間者なると明かなれば、嚴しき上にも嚴しくせずは、蟻蛭より堤の潰るゝ悔あるへし。——三郎來れり。待てる如く今宵渠は夏の虫の火に入らむとて來れるなり。

三郎來れり。渠は今夫婦に會釋して坐に就きたり。渠が心は阿玉の故に甚だしく激昂せり。然れども強て情を鎮め思を壓へて徐ろに口を開けり。叔父御よ、長き間吾身御身の蔭によりて、心易く修業に從ふとを得て、感謝の意は言辭に盡すべく

もあらず。今は吾身も普通の齡に達したり。此上にも猶ほ叔父御の心を煩さむは太と心苦しければ、是より親ら亡父の世を襲てもと欲ふなり。固より急ぐとにはあらねど、此意豫じめ白し置くなり。阿國は心に冷笑ひ巧しき口よ。一言だに報酬と云ふとを言はず、甘き舌もて五年の間の膏血を餌を嘗むる如く嘗め盡さむとは、齡にも似ず懲深し。誰が然る智慧を容れたるぞ。」

管理者は煙を吸ひつゝ坐を直くし、謝せられては面目もなし。兄弟の義あるが故に、此家をば托かりしかども、我に此の營業の經驗なきのみならず。叔御に家を出られてより、商議するものは妻あるのみ。斯て世上の氣運漸やく罷弊し来るに加へて、姐御の東陽樓を起して此家に敵するに遭ひ、爲に多少の負債を生じぬ。此は猶ほ忍ぶべけれども、嚮に不慮の券の顯はれしより、家は今礎石より震へる際なり。今日御身の請求し玉ふを待たず、三年以前より家は御身に還すべかりしを、其時御身に延期を請ひしも、傾く運を挽回せむとの意なりしなり。今は非常の困難に際せりと雖、我に猶ほ心算あり、亡兄の失計を顯はさず吾名をも墮さずして、御身を満足せしむべき望なきにあらず。猶ほ二三年の延期を許し玉はむや。斯く云

ひて三郎が面を窺へども、三郎は驚ろきたる色もなく、五年と云ふ長き間、家道に浮沈あるは當然の理。唯其衰運の時に當り玉ひし叔父御の苦心のほど何とか謝せむ。斯く無爲き營業に此上叔父御を拘留むへき様はあらず。傍より阿國は遮ぎり、恢復の望あるまで辛にして運ひ來しを直に取去玉ふは餘りに無情き處置ならずや。如何にも痛はしきとなれど、吾身は今度是が爲に歸省したれば、是非とも家を譲り受けまほし、「御身には遙かに隆ゆる東陽樓のあるにあらずや」否、東陽樓は唯母の餘業に過ぎず。此家は吾身譲ては能はぬ亡父の遺業なりよし先君の家と云ふとも斯かる空屋を何とか爲玉ふ、さほどに良き店あるが上に、猶ほ此家を忘れ玉はねは餘りに慾深き業ならずや。三郎は怫然として、慾深くとも淺くとも、襲ぐべき家は襲では能はず。そを強て拒み玉ふならば、

管現者は妻の言玆處なりと、碎くるばかりに煙管を敲き、咄、誰が強て拒みなるぞ。斯くまで理を覈ちて言ふとを聞く耳なくして、叔父を盜賊の如く呼ばるゝは何事ぞや。我吾家を抛ち營業を抛ちて、愁ひに御身の家を利せむとすればこそ、墓奪者の如く云はれもすれ、墓奪者にてある乎、不ぬ乎、今志を明かにせむ。よく心を定め

めて驚き玉ふな。と、煙管を投げて突起ければ、三郎は意外に叔父に憤ほられて、衷恐ろしく思へる同時に阿國は蕃皇て留むれども肯かず、盜賊の名に呼ばれて、躊躇ふべきことやはある。我は即刻此家を還さむ。阿國は心に酒の効の過ぎぬと云ひつゝ、五介が投出せる帳簿と券を手を出して急に收め、左様に怒り玉ふとかは、三郎主とて妾の戯言の爲に辭の過たるにこそあらめ。嘸三郎主然にあらずや。今速に帳簿と券とを投出し玉ふとも、人の眼の網にもあらねば、豈で一見して明瞭ならむ。三郎主も急にとは宣はねば、子細に精査たる後にこそ、家をも帳簿をも還すべけれ。然はあれど御身も必ず其要領を知らむと欲ひ玉ふべければ、妾短簡に白し置くべし。

主婦は三郎が前に古き帳簿を取り出し、先づ其表紙を披きて第一頁を指摘し、當時妾等が托りし七千金は明かに玆處に記されぬ。と、猶ほ末尾の頁に翻へし到り、されども前に陳し如く、相尋ぎたる世間の疲弊と、姐御の激き競争の爲めに家道漸やく傾かむとし、止とを得す斯の如く二千金の負債を生じぬ。此負債に由りて、辛じて滅むとする燈火の油を注ぎてありしに、當春遽に顯はれたる不慮の券に、風

前の燈火と世はなりぬ。其券は即ち是なり」とて券を取りて帳簿の上に抜き、御身の家を管りて御身の修業の費を致らさると、酷しき處置ありと、御身にも思はれ、我等も亦自ら恥れども、實を首せは亡兄の世に在せし間、兎に角に輝かし玉ひし祇園第一の名譽を繼がむ爲にのみ苦慮して、其他を顧ふに暇あらず。日亦一日浮沈みつゝ遂に今日の危機に逼れり。我等家を棄て身を棄て、此家の爲にせむとて却て此危機に當れるも亦一時の厄運、自ら願れば咎むる所なけれど、昨日の繁華今日の零落、變遷の甚だしきに世上の非難、御身母子の所思を考ふれば、豈でか心に安からむ。自ら罪なしと思へども、猶ほ過誤ありけむとも思へば、巨細の事我等自ら白状すに苦く嚮に御身の請ひ玉ひし時、辭みて延期を請ひたるとも、御身の修業の心を痛めむとの憂かりし故なり。圖らずも今日御身の促し玉ふに由りて、明らかさまに告げ参らすとはなりぬ。御身は我等が私慾の爲に強て拒むものゝ如くに宣へども、此券の出てより、文字、印彰の眞偽、券面の時日の鑑識の爲めに、有む限りの方便を盡し、事遂に我が不利となり券の時過てあれば督責厳しく、辛ふして今日までは遁れただども、猶ほ巖を負ひて不測の臺に臨むものゝ如く、す前

暗黒何時頃かむも測られざる此間の苦心、御身は如何と察ひ玉ふぞ。其を情なく宣ふ故にこそ、主人も憤り玉ひしなれ。去るにても一藏主の平生にも似ず、此ほどの巨額の負債を、帳簿に記し玉はぬのみか、母御にも我等にも明し玉はず、唯其心にのみ封鎖られしは深き理由のありし故平。縱や如何なる秘密ありとも、祇園坊の主人と呼ばれ、百事不如意のなき身なれば、他に人もあるべきに。夫の大川洪然の如き悪人を頼み玉ひつること、諭しくも亦悲しけれ。且つ此樓には万金以上を費し玉ひきと聞けば、假らば猶ほ大きく假り玉ふべきに、其半額にも足らぬ券の爲に、礎石に指さるゝとの無爲なさよ。彼を思ひ是を思へば、はや西陽樓の運命の盡ぬ時節の來れる乎。

阿國は今愁然として涙を湛めて偷視し、五介は眼を磨して三郎の氣色を察し居れり。最初より默聽き居たる三郎が胸中は、懷疑、惶懼、悲憤の念漸くに焰え來りてありしが、最後に到りて心氣激動の餘、遂に茫然として自ら忘れぬ。少焉して自個に復り、詳さに帳簿を點檢すれば、二千金は出すして入り、券は亡父の手跡よりも巧く亡父のに似てありければ明かに夫妻の奸計に陥れりと知れども争ふ術

なく、殊に一撃に渠が意を碎きしは、万雷人を仆れしむる大川洪然の名にてありしなり。渠は今血冷め面青ざめ唇緩みて一言を發たず、擊れし頭を垂れながら悄然として主室を退かれり。渠が落膽無爲の容を見て、阿國は面も輝くばかりに放笑み「妾が計畫如何に巧に的れるかを見玉へ。渠が囁れし犬の如くにして退るを見れば、事は既や成れるなり」と云へば、既に醉氣の醒めたる管理者は、頻に胸を悸かし「否どよ。世に绝望の人より恐るべきはなし。渠既に望を失へば身を棄てゝも暴ぶへし」とて甚だしく憂ふる様なり。阿國は和めて顯微鏡を懸けて見ば、豆の如き渠が膽も斗の如く見ゆべけれど、家を恢復さむほどの大事を、乳臭き小兒と謀らふほどの小さ人物、恐るべきかは世には往々護謨人形の如く、平生には柔かにして、胸の焰に炙らるゝ時自ら裂る愚痴者多し。渠も亦其一人にして、自ら柔かならんば自ら身を裂むのみ。憂ひ玉ふとはあらじ」と云ひつゝ遡に思ひ出で身を起し、妾は阿玉を視て來なむ。渠をは錮め置たれども、三郎の忍び往かむも測られず。五介も然なり、我も亦心にかゝる三郎が舉止を偷知らむ。斯くて企圖の一肺は身を左右に兩分ちて出でぬ。

三郎が落膽の情、一簸して憤怨の極點に飛べり。渠は心動きて臥る能はず。寐處の周圍を廻り歩きて憤々とのみ洩てありしが、遂に呪咀の口を開けり。室の外には身を柱に寄せたる五介、耳を側てゝ竊に偷み聽き居るなり。

三郎さても憎むべき惡魔よ。私は渠等を何にか譬へむ。固より潔く還すまくじとは期したれ共家を擧げて奪はむとは圖らざりき。斯まで我に情なくば、亡父の骨肉、甥と叔父の繫縁ありとも、報うに憚かるとやはある。栗田よ、栗田よ、渠はよも未た寝てはあらじ。疾く往きて渠に沓らむ。看よ明日渠等を法庭に喚出して、蜘蛛の肚を抓き破りてむ。」

五介は愕然魂を消し、喃待ち玉へ、法庭を須ずとも、我今圖謀を白狀せむ。我が強顏く怒りしより、御身は我を怨みてあらむ。されど其企圖の張本は、三郎嗚呼、法庭爾は何故に重き手を吾首に加ふる。爾は猶ほ黠猾き醫師の健全なる者を珍じて病める者と爲すが如く、無罪者を有罪者と作すにあらずや。嗚呼、法庭爾をして家庭の如く我に温かならしむるとも、五年と云ふ長き間計畫たる圖

謀をば、豈で一二日の間に發き得む哉。況て非謀の對手は大川洪然渠企つれば陥らぬものなく、渠計れば發くものなきベルゼブルをや。然れども我は吾正義の劍もて戰ひてむ。今夜直ちに栗田に詢り預じめ廉直公明の法官に事情を詮け置かむ。

五介、哺待ち玉へ。其企圖は云々なり。我明白に御身に詮げむ。法庭をば断念ちてよ。三郎されど法庭に於て正義の劍の奸曲の脇を斷つもの幾何ぞ。奸者の非謀を公認する特許場たる外。法庭は果して何ぞ。法官よ、爾が正義の使者たるもの果して幾何ぞ。苞苴の狗鼠たらざるもの果して幾何ぞ。黃金を懸けざる美姫は醜婦に畫かれ、公職を恃みて贈遺せざる正人は奸舌に罵倒せらる。善人は其善を盾として謀なきが爲に敗れ、義人は其義を守りて工夫なきが爲に傷き、唯惡者の賄賂のみぞ勝つ。吁我既に後れたり。他の家を奪はむ程の渠等にして、何時まで手を空くして法庭の召呼を待たむ。吁我豈で非謀の特許の坐に堪えむ。豈で法律の遲延に堪えむ。木を刻みて吏となすすら我實に對せざらむと願ふ。

五介は雀躍せむばかりに喜び嬉しや斷念ち玉ひし平、斯くてこそ活き回りたれ。

願くは今之心を翻へし玉ふな。法庭ほど忌むべき處はあらじ。三郎、法庭は依るべからず。法官も亦友ならば、我は將た如何にすべき。母御に否。母御は我を留め玉へり。然して其豫言の斯く的れる時に、何の面目ありて母御に見えむ。阿玉は一阿玉は脆も捕へられたり。酷く責られなば實をや首かむ。吁我は如何すべき。抑も世は如何なれば斯く惡人多きや。惡人の手如何なれば斯く巧なるぞ。上帝天使は何故に目を閉ぢたる。何故に耳側だてざる。起よ神の手。我を圖るものをして圖られしめよ。渠等が計りし其圖謀を天國の鏡に寫さしめよ。渠等が書きたる其詐偽を陰府の淵に書かしめよ。渠等が生む所の子をして、我が奪はるゝ如く奪はれしめよ。其子胎内より流るゝとなく、此の惡き世に、擊れ、奪はれ、巷に迷ひて亡ぶべく生れ出しけよ。罪の手罪より離るゝとなく、其罪を墳墓まで負しめ、其腸を地獄の熱湯に洗はしめよ。然れども我將た如何にせば可ならむ乎。嗟乎我爲すべき所を知らず。

五介は再び冷水を蒙れる思を爲し、實に實に吾足下には地獄あり、眼前に果報あり、胎内の子も亦其運命に懷かれて居るなり。噫。

「郵便」如雷一叱咤、五介は胸を打たれて仆れむとせり。渠は辛うして歩みを潜めて主室に復れば、家婢は一頁の葉書を持來りて主人に呈せり。渠は氣息を靜めて左の如く読みたり。

親愛なる吾友よ。我等同門の明明日黎明疏水より葦舟を琵琶湖に浮べむとし、泗泳王たる雅兄の偕に遊ばむとを願へり。雅兄若し此意を了せば、日出前若王寺前の埠頭に於て相待たむ。

八月十四日

栗田敏雄

噫、此書信何が故に今宵來れる。栗田琵琶湖泗泳吁此書信は我等を破滅するに非ずむば渠が絶望を満さむものならむ。如かず此まゝ秘め置かむに然れども渠は今罪の手罪を離るゝなど云ひしにあらずや。我今之を藏さば、詛言は忽ち我に成らむ。如かず公然に渠に傳へむに傳へて渠を慰めむに。

斯く考へて渠は葉書を手にして書齋に往けば、三郎は既に寝處に入りぬ。五介は聲を低くして「御身ははや眠まれし平」。三郎は起きもやらず許し玉へ微しく氣色

悪ければ、「我嚮には誤りて辭を過しぬ。猶ほ如何様にもなるべければ、深くな心を痛め玉ひぞ。唯今栗田氏より書信到れり。起き玉はずや、栗田氏の三語、三郎を跳ぬ起したり。渠は五介の手より葉書を受け、火影を掲げて流讀し、遽に衣を更めたり。五介は驚き向處にか往き玉ふ」。問ひ玉ふまでもなし。栗田が許に「此の深夜に」然り明日黎明琵琶湖に舟を浮べむと云ひ来し、且つ他に急ぐ所用あれば。御身は今氣色悪しとて臥し玉ひしほどなれば、今宵は勿論快癒る迄は止み玉ふこそ宜からぬ。否、我是泗泳を好めり、如此許の微恙は泗けは癒ゆ。且つ御身も嚮に疏水を觀よと宣いき。」。それは今日明日にと云ひしにあらず。今宵は曲げて止み玉へ、如何なる誤あらむも知れず。然なり、若し誤らは止矣なり。隨意に水を飲むで、今日まで人を疑ひし心の汚れを洗はむのみ。何時まで御身等の心を煩はさむ。三郎は袖を拂つて起ち、竹櫓を踏鳴して出で行けり、五助は猶ほ渠を尾ひて御身左様に怒り玉ひそ。今宵の事は猶ほ如何ともなるべきなり。哺、哺止みてよ。待ち玉へ。御身は遂に往き玉ふ乎。さらば恙なく歸り玉へ。哀哉三郎は外面に喚ふものあるが如くに駆け出で、唯前方を見るのみにして、一たびも後方を顧すして去れり。五介は偏に心

憂ひて門前まで尾ひ出でたれども、月闇くして形影を失へり。嗚呼、明日

## 第五 東陽樓

### 其一 主室

終日欄杆に立ち盡したる日影は消えて、夕は再び祇園坊を訪ひたり。甍瓦を燐きたる熱は稍冷めて、垂楊の懷より微風扇げり。巷には前門を掃除むるあり。軒下に清水を撒くあり、呼び歩く販兒を呼びて購ふあり。櫛を隔てゝ翠籠を捲くもあり。東閣西樓各々夜間の準備を急げるが裡に、遠き街端より色を失ひて馳せ来る一個の家婢と、門に立ちて煩悶らへる一個の主婦と、其不穏の様を以て、此の合奏したる巷を驚かすものは何の故ぞ。

主婦は身を回して主室に入りたれども、胸悸きて坐る能はず。三郎はそもそも何をか爲つる朋友に時辰儀と呼ばれ、潮と渾名されし身にして斯くも晚るゝとの怪しさ。渠は今朝來むと云ひき。我は朝より晝まで待ち、晝より夕まで待ち、斯の長き夏の日を一日待てども、渠は來ず消息もなし。來るも來ざるも確たる所用のあるにあらねど、來むとて來ざる渠にはあらず。或は益なき談判の端緒を開き、其局の眉

ほ結れざる故乎。万一家渠等の蛇蝎の牙に噛まれて、心を短ふしたるにあらずや。時辰儀は打つよ。心も碎くるばかりに打つよ。はや六時、日は没たり。平生事に恐れぬ胸女丈夫と稱ばるゝ我、如何なれば今日ばかり斯くも悸くぞ。今一倍心寬く偶には辭を食むほどの子ならば、かほどに胸を痛めねども、餘りに雌々しき渠なれば如何なる事をか。」

阿貞は再び下りて戸を出むとして、轉ひ入む婢に擊たれぬ。太守の君は在せし乎、返事は如何。婢は呼吸を吹きつゝ告ぐらく。妾は途中より返りたり。郎君の溺れ玉ひきと聞きて。如何と。郎君は今日琵琶湖に泗きて溺れ玉ひきと。主婦は沈着たる容に待なし。三郎が溺れたりとや。そは定めて誤聞ならむ。渠は泗術に長けたれば水し玉ひきと傳へぬ。阿貞は茲に初めて驚き、猶ほ詳かに問ふ所あらんとする時、兩個の大學生を乗せたる二輪の腕車門前に止まり。阿貞は忙しく出迎へて、栗田の君にて在す乎。實に渠等の一個は敏雄にして、他は三郎にてありしなり。敏雄は悄然として車を下り、叔母御よ意外なる珍事起りぬ。主婦は歎めて面を強くし、

其事は今聞きて妾も知りぬ不慮の事に如何許御身の手を煩はせしとよ。と敏雄の助を藉りて死骸を佛間に運びたり。

## 其二 佛間

新らしき佛壇、其金光の少しも曇る所なく、花瓶、飯具の染む所なきより見れば久しく閉ぢしものと見えたり。然れども猶ほ香の腐臭の暗に衣を襲ふを聞けば、全く閉ぢしものにもあらず。或は亡夫の命日とに開かれしものにもあらむ乎。終日隠氣の籠れるが上に、夕の影の漸く天井を掩ひ、香烟も亦高低して人に纏ひつ、凄々として夏冷かなり。遺骸は寂しげに佛前に横ばり、阿貞と敏雄と其前に對ひ坐したり。阿貞は濕れる調子にて、鳥邊山の夕烟、大谷の白骨是まで他に看過したりしが今は吾子の身の上とはなりぬ。——さるにても如何様に喪ぬるか、其事情をば聞かせ玉へ。そば問はるいまでもなし。昨日の夕、我同門の友相謀りて、今朝琵琶湖に舟を浮べむと、君をも誘ひ、黎明に若王寺前より漕ぎて湖上に出で、唐崎に着く頃は頓て日中に近かりき。同伴は五箇なれども、水を知るは君と我とのみなれば、小舟をば岸上に繫きて、他は松の樹蔭に憩ひ、我等二箇は波に投じぬ珍ら

しき今日の炎暑、燠くが如き日中の陽影氣は蒸して風もなければ、水を浴ひる快意に心浮れ遙に島嶼の影を望み、沖間に泛べる帆をば目標に碎けて走る金波を追ひつゝ、前後を争ひ、不圖頭を回せば遠く來れり。我驚きて君を呼びつゝ、身を廻せしに、君は兩三度頭を點じて我に言ふ所ありしかども聞き分す。繼ぎ來よとの心ならむと察ひしかども、我は危みて從はざりき。君は直ちに沖に向ひて出たれど、泗泳王と呼ばるゝ君にしられば疑ふとなく、其儘に岸に上りて顧みれば、君は正に沖間にあり、此方に向ひて頭を擧げたり。我は其時身及つや如何と呼びしに、君は海上より頭を沈めぬ。須臾して再び顯はれたるが、疾く返れど呼ぶや否や、復た忽ちに没頭みたり。人も我も始めて驚き直ちに舟を飛ばしたるに、一頃も漕がさる裡に、君はしも三び浮び三び沈めり。急ぎ舟は沖に出たれど、一面の綠波、君は再び頭を擧げねば、搜るべき所を知らず。彼處と云ひ此處と云ひ、十餘尋の湖底を幾度も潜りたれども容易く見えず。辛うにして索ね出したるは、既に半時間の後にてありき、舟の中陸の上百方に力を盡し、濱の人を呼びて手を盡くさしめたれど、事はや止みてありしなり。意外の變事に、他は皆爲す所を知らねば、吾身先づ遣

骸を運び事情を告げむ爲に歸りぬ。唯今まで頭を并べて泣きしかば懷へば、唯々夢の覺しに似て。」  
 流石に心強き女丈夫も愁然として眼を瞑ぢ暗然として面を俯し、陰沈みたる無言の裡一滴二滴涙は落ちて膝を打。少焉して再び問ふらく去るにても苟且にも泅泳に習ふ身にして還るを忘ると云ふとはなからむ。渠が往て還らざりしは尋常の過誤とも思はれず。御身は他に察知き玉ふとも無かりし平衰萎れたる栗田の心は此質問に興されたり。其事なり。昨夜深更、我は既に寝處に入りてありしに、君は誘引状の今到きぬとて訪ひ来れり。起き出て迎へたるに、君が辭色の最と穩かならねば、竊に其故を問ひしに、君は曰く、叔父夫婦の吾家を奪ふの計畫熟し、晴暉樓に對する二千金の負債と、大川洪然に對する五千金の券を虛構りて、酷くも我を欺けり。遺憾き哉我欺かれぬ。吾家は奪はれぬ。天は如何なれば斯かる奸者を活し置くぞと齒を囁みて憤りしなり。我は君の杏間に答へて、其恢復の方便の易々たるとを告げたれども、君は猶ほ遺憾遺憾との怨み云ひき。阿貞は遠に面を起し聲を作て、そは何とか宣ふ。負債と券を訴り構へて然なり。君は晴暉樓に對

する二千の負債、大川洪然に對する五千の券を以て奪れぬと告げにき。さては果して然りしなり。宜し今は黙すべきにあらず——さるにても渠は一度も死と云ふことを洩さりし乎。然なり。斯くて君は吾臥床に寝ぬ。憤り怨みたるまゝ眠りしが、今曉家を出ぬる時は、顔色全然一變して快意言笑に溢れにき。他は皆君が平生の沈黙に似ざるを怪み、我も亦君が望の復活り來れるものと思ひて往きしか、今にして之を思へば、君が望或は此世の外の望にてありしならむ。阿貞は再び大息して涕湛み宣ふ所に違はずらむ。思ふに沖にて御身に告げづる不了語も、永訣を宣べたるものにこそあらめ。實に今我も然か量れり。然して吾身には猶ほ之より重きものある如くに感ゆるなり。そは他なし君が意志なり。我は君より恢復の方便を質されぬ。吾答辨は君を悦ばすに足らざりしかども、今にして之を思へば明かに君が遺言もし思ほゆるなり。君既に叔父氏に陥れられしのみならず、久しう京都府の正義を害ひなる不義無道の大川洪然亦既に君が敵たり。我願くは亡友の爲に、府民の爲に、此元兇を除かむとを冀ふ。御身若し此儘にして止み玉はずむば、願くば後事を我に委ねられむとを。我は猶ほ學生にして、未だ試みざるの

器なれども此而已の經緯を理むるの力なしとは信せず。御身に不利を負はしむことは萬あらじ若し吾言を信じ玉はずば、我等の講師帝國大學の教授をは信じ玉へ。幼少より交誼を辱なふし、今に十餘年の久しきを経て、生前一事の君を益するとなかりし我が君の知遇に報ひむ道は唯是のみ。

斯く云ひつゝ慨然として腕を拱むて頭を垂れたり。渠が拭くと屑しとせざる涙は、一點一點袖を打てり。然らぬだに吾子の不肖を歎きし阿貞は、渠が進むて事に任ずる丈夫の意氣に感じて、慚愧、悼惜、悲痛悔恨交其胸を断ち、言ふ所あらんとして而も言ふ所を知らざりき。良久うして口を開き風聲にも聞てありしが實に多望しき君が意氣よ。斯くまで意を盡したび玉ふ好情豈でかは辭むべき。三郎の喪だに終らば、万事御身を煩はさむ無似なる子を朋友に加へて、無爲く果てたりと憫笑ひ玉ふともなく、死後まで力を副へんと宣ふは、そも如何許の厚志ぞや。否とよ吾身は唯君が交情に報ゆるとの及ばざるを恐ゝのみ。然らば復び君が葬儀の刻に参堂らむ。阿貞は退る敏雄を送り、再び坐に復り來り、死せる三郎を見て、今まで制へし恨悔悲歎、一時に胸に溢れ來たりて思はず震ひ共に同じ節にして、敏雄の

君は斯ばかり雄々しきに、御身は何故斯は唯々しき。母の諫言に止まは止みなむ。一たび思ひ立つものならば、縦ひ如何なる企圖の陥穿の底に落つとも、叔父夫婦と大川洪然とを敵として相戦ひ、法庭に勝負を決し、事窮したる後にもあらば死すとも、男子の所爲に近きを、大學優等の學生にして、洋行せむとまで思へる身の、其望の大なるにも似ず量狹く、些細の遺業、青樓の主人を心より放と能はずして、益もなき緒を啓き、而も一旦緒を啓きながら驚かされて尊き身を無爲くもなし玉ひつるとの遺憾さよ。思へば昨日吾身を常盤巴に擬へ、御曹子にもと思ふ大學生の母とし誇りつるとも、御身の入水に泡とはありぬ。朝比奈も御身と同しく三郎なるに、世に聞えたる勇士の名も、遂に御身を勵まさりし平。父御は固より、母さへ女丈夫と云はれてあるに、御身ばかりは心小さく生れつる乎。さりながら善く泗くものは溺るどそ聞く。或は泗術に誇りて誤りしものには非すや。よし人は如何に云ふとる、母は御身を誤りたるものとぞ稱はむ。

此時家婢は静に入来て、五介夫婦の訪ひ来れるとを告げければ、阿貞は面を拭き容を改めて主室に出迎へぬ。

## 其六 西陽樓

### 其一 主室

黄昏も既に過ぎぬ、五介は三郎を弔ひしより歸りて、唯一個寂しく主室に坐した。儘四壁の闇くなるをも識らず、悽然として既往を悔たり止ぬる哉。世に男子ほど爲なき者はなし。夫を所天と云ふも名のみ、其實は婦女の影なり。渠爲せと云へば爲し、渠取れと云へば取り、渠酒を酌めば酒を飲み怒れと云はるればまた色を變へ聲を作て、も我威せり。昔時耶蘇教法師が原罪と云ふとを説くを聞きしに、夏娃となむ云る妻が先づ禁果を茹ひ、之を亞當と云ふ良夫に勸めしとなり。其果の名は——然り智慧の果實、其を茹へば惡魔の如くに黙くならむとの神命にして、之を茹ひたる夫婦は果して眼開き耳聞えて、非望の念萌せしとなり。思へば妻に唆かされて、心にもなき毒液に指を染めたる我が今日の境遇は、智慧果を勸められて其を茹ひし亞當に違ふ所幾何、罪の手罪より離るゝな。行々罪と共に行かば未來の我はそもそも如何なる大罪人にてあらむ。一去るにても苟且にも男子たる我、何故に斯く心弱る寧ろ初より無心の影の形に從ふ如くなならば却て心は安

かるべけれど、拒む心餘りありて拒む力足らざる苦しさ禍なる哉婦女の辭宛も

猶ほ空氣の如く、拂へども身邊を離れず、阿片の如く、飲まじとすれば口に入り咽を下りて良心をぞ捲く、已ぬる哉、我は既に妻の舌に鳩せられたり。

此時門前に快よく走り來れる車止まり、阿國は身も軽けに車を下り、光る笑顔もて闇を照して主室に入り、熟々身邊を視回して僅に五介の面を認め、燈火をも點ずして此闇中に何をか爲玉ふ。と自ら搜りて明燈を備け、得々として良夫の傍に坐り、左様に煩ひ玉ふに要ばず。只今晴暉樓に詣りて事の情を語りしに、主人は踊躍して二千金の券を拜き、一一十十、我等を賛くべしと誓ひぬ。さればはや夢も安く得寝ぬへし。五介は手を拱みて嘆息し、低聲に答えて曰ふ。巧なる企圖も拙なき實には如かず。看よ阿貞が三郎の無爲きをのみ責めて、一言も我等を咎めざりと見て臍をは噛みそ。阿國は興味も醒たる顔して、計畫は既成れるに不詳の言を宣ふは、自から事を敗らむとばし爲玉ふ心乎。今にして思ひ絶つとも、御身一個咎を免れ玉ふ様はあらじ。御身若し母錢の生みしもの半錢にだに指を着ず、手を洗

ひ衣を脱ぎて此家を出で玉はむとの決心ならば、固より妾も思ひ絶ちなむ。坐から享くべき万金の富を棄つとも、明日より路上に食乞ふとも、最愛の一箇の嗣子を生れしまゝ夜捐つとも、妾は本是れ御身の妻なり。御身だに可と宣はゝ何事も命に従はむ外はあらじ。五介は斷然慾を断つと能はざれば、斯く詰られて愈々窮し聲も愈低くなれり。否、中途に事を止めむとにはあらず。吾心は固より決まれり。唯々御身が事を忽せにして誤たむとを恐るゝ故に、爾か云ひたるのみ。さらば如何にせよと宣ふ乎、渠は遂に頭を搔き、如何にとて、我に爲む術はなけれど……時

に奥室に歌ひあるく舞媛の聲して、

わがせの君の乗る舟は、

沖のかすみにかくれけり。

それぞと呼ばむ影もなし。

五介は遽に心づきて夫の阿玉をば如何かせずば能ふまじ。阿國は太と沈着きたる様にて、阿玉の事は妾に疾くより思ふ由あり。渠をば御身の妹として秘養はり

如何。阿國は急に容を改めて苦々しげに良夫の顔を視、熟々御身の心を量るに、御身は渠を妾に代へむと欲ひ玉ふに似たり。渠は他の童女と一樣の童女なるに、渠に舞曲を學ばしめ、渠を他の童女の首に置き、猶ほ賓客の坐に舞はしめ、剩へ幾度となく渠を懷かむと爲玉ふを以て見れば、妾の棄られんと近きに在るべし。妾は固より娼婦の餘身、御身の室に侍るべきものにあらじと、當時再三醉みたれども、聽き玉はざれば枕席を汚しぬ。御身の胤も斯く身に在り。今にして棄られなば妾は何處にか身を寄すべきと怨み來りて、面を掩ひ、愁然として涙ぐめる様に、五介は驚き詫るが如くして云へり、「我過てり過てり。唯一時の戯にてありしに、痛くも御身が心を傷めぬ。許し玉へ決して再びせざるへし。」

阿玉は嚮に己が室に密鎖られ、其夜再び玉藻が室に幽られて嚴く三郎との消息を杜絶てありしが、三郎死して、禁錮も漸く緩められたる同時に、然らぬだに痛み疲れたる情の、郎君の遠逝玉ひぬと聞きしより、悲哀の餘遂に心を喪へり。渠は美しく舞衣を裝ひ、情人より賜はりたる扇を擧げて、日の夕より舞亂れてありしが、夜に入れども猶ほ廢まず。漸く主屋の竹櫻にまで舞來れり。

昨日の夕わがせこと、

むすびし夢や夢ならむ。

あやめもわかぬ闇のうち、

うつゝに似たる影もなし。

われもかたみに成にけり、

扇と云ふも名のみにて、

心をあてに招けども、

ついに還らぬ人ぞうき。

斯く亂調に舞來り舞去りて、又遠く舞ゆけり。五介は漫ろに哀情餘りて涕を垂れ憐れのものよ。斯く心狂ふまでも三郎を思ひつめし乎。阿國は冷かに煙草を吸つゝ、三郎が爲に喪心にまでなれるものを如何に秘養はむとすとも。豈で我等に從ふべき。渠が爲には生きて御身に愛られむより、井に陥りて三郎に従ふこそ勝れ。臆ふに今宵渠は必ず狂ひて井に身を投くへし。五介は益々胸を憐かし、三郎が死

たるすら心外なるに復び阿玉を失は。世人は我等を何とか云はむ——果して渠が詛ひし如し。「渠が詛ひし如しとは」五介は一時黙してありしが、痛く眉端に愁氣を帶びて、昨夜三郎絶望の餘、神明に向ひて我等を詛ひき、罪の手罪より離るゝなく、其罪を墓場まで負はしめ、其脇を陰府の熱湯に洗はしめよ。夫婦の子を我が奪はれし如く奪はれしめよ。阿國は少しも懼るゝ色なく、渠も人なり。それほどの言は云ひもせむ。猶ほ驚くへきことを云ひき。其夜我が渠が外出を留めし時に云ひき。若し溺れなは止矣なり。隨意に水を飲むて、人を疑ひし腸の汚れを洗はむ。渠は正しく我等を怨むで死たるなり。阿國は愈々冷笑ひて「そは宣ふまでもなからむ。人は皆怨むで死ねども、死て怨みし例は少なり。諺にも幽靈は恐るゝものに顯はる。ところ云へ御身だに恐れ玉はずば、何物か御身を恐れしめむ。御身は微しも恐るゝ所はなきや。」固よりなり。妾は唯事の就らざらむとを恐るゝのみ。三郎が喪の故に、此夜門を鎖てければ、樓上樓下寂として音なく、唯舞媛の舞ひあるく聲の往々遠近に聞ゆるのみ。

妓女童女等は前にもなく後にもなかるべき暇日に逢ひて、一日を千秋の如く遊  
ひ暮て、初夜より婦女の極樂なる睡眠の床にゆけり。夜は森々として深けたり。夜  
半の鐘聲隱々として遠く沈めり。舞媛は既に室より室に舞ひあるき、再び暗き書  
齋に返り来れり。渠は身も心も舞ひ疲れ、處々衣裳綻び、髪は解けて房々と肩にか  
れり。渠は今亡き情人の机の前に髪抜きあげつゝ、暗然として涙を垂れたり。

むすぼほれたる髪も、

肩をすきたるくろ髪も。

絶にし君が玉の緒を、

つなぐ術こそあかりけれ。

廊下に光明射し來り、竹様に足音忍びぬ。忽にして燈明と酒壇とを携へ来る容見  
えたり。舞媛は恐れ戰き、遙に退きて「ア、ア」と叫べり。阿國は手中のものを机上  
に置き舞媛を視て、嫣然と微笑み、聲を低くして渠を招き、此處へ此處へ、少しも恐  
るべきとはなし。疾く來よ此處へ。御身のために嬉しき事あり。來此處へ、舞媛は益  
身を遠げて、少しも嬉しきとはなし。郎君のものはや世に在さねば、「否とよ、郎君は一

たび死て復た蘇活り玉へり。虚言よ虚言よ。君は黄泉にたちませり。君は此世によ  
しまさず。聞き分けなき子よ。君は今生回りて「阿玉」「阿玉」と呼び玉へり。阿玉は始め  
て嬉しげに走り來り、君の猶世に在すとや。眞個に吾身を呼び玉ふと。然なり。夕  
刻より蘇生りて、阿玉「阿玉」と呼び玉へり。御身は君の處に往かむとは思はざるや。  
阿玉は喜悦に堪えざる容にて、往くよ、往くよ、吾身を伴て往き玉へ。と、狂者一様の  
空笑を帶び、忙しく阿國の傍に來りて坐れり。憐れなる舞媛は、此福音の爲に其心  
を癒されざるのみならず、無意無心の小兒に復りて、鬼子母の如き阿國の腕に生  
命と運命とを懸けしなり。君の處に疾く伴てよ。阿國は快よげに其背を撫で、請ひ  
ては能ふまじ。阿玉は訝しげなる顔して、否とよ、吾身は少しも心狂はず。見玉ふ如  
く御身の傍に行儀端く坐りてあるを。「まことに好見よ。去れば我が言ふとを聞く  
べきや。」宣ふ所能く記えぬ、君の蘇生へり玉ひきと。然なり。唯其事ばかりにあらず。  
君は今より此家の主となり玉へば配偶なくては能ふまし。されば吾身媒介ちて  
明朝御身を東陽樓に嫁らすべく欲ふなり。御身は君を厭ひ玉ふや。舞媛は「否、否」

と髪を振りさりながら君は吾身を憐ませ玉ふべきや。云ふまでもなきことよ。さらば吾身の祖母御をも。然なり必ず此家に迎へ玉はむ。何時吾身は往くべきや。明朝なり。否。今宵直ちに往かまほし。阿國は微笑み眞個に嬉しかりげの風情よ。眞個に往かむと思ひ玉ふや。さるにても斯様に衣綻び髪解けては必ず君に厭はるべし。今宵一夜静に寐まい精神も癒り、吾身其間に髪も結ひ衣の綻も縫ひ置きて、夜明けなば日出る前に嫁らせむ。吾身は少しも眠からず。此儘に髪結ひてよ。否。夜寐ずしては悪かり。爰に良き催眠剤あり。と壇を視せば渠は見てこそは必ず葡萄酒ならむ。否。葡萄酒よりも甚と甘し。之を飲めば胸爽かに心清しく何事も忘れて寝るなり。斯く云ひて壇を傾けて壺に酌み、そを嘗めて甘きとよと舌を鼓せば、阿玉は遽に腹空たる心地して、吾身にもとて壺を取りて暫時は口より放だざりしが、壺を置くや否。陶然として醉ひ苦しと云ふほどもなく、直ちに穩々と身を忘れて眠の淵の底に沈めり。

阿國は罪なく障なき圓き睡顔を熟視たり。燈火は其の半面を丹く、他の半面を照らに照して、夜叉の膝下に寐たる容を、愛らしきよりも尊とく見えしめ、稚兒の眼れる時の如く、夢中の笑の往々面を扇ぐを寫すとすらありき死骸を見るよりも畏しき此睡顔と渠は思はず身に粟立てゝ色著ざめたり。渠は其舞衣の袂を把りて翻へし、其畏しき睡顔を蔽ひぬ。渠は今決心つて此小菩薩を懐かんとせり。渠は其縮み下れる手を振擧げて机の上の壺を取り、息なく飲みて唇拭きたり。渠は猶ほ頭を擡げて燈を吹消せり。渠は再び手を下し遂に舞媛を懐きたり。實に渠は頓て自個が生まむ子を懐かむ様に腕軟かに懐き上たり。斯くて渠は闇中を出て、主屋に對へる一貞の戸に右手を着け、戸の自ら開くが如くに開き滑るが如くに庭に下りたり。今まで皎々として一毛を遁さりし中秋の月影宛も一團の黒雲の背に遁れて、陰暗たる夜の色確に渠が爲さんとする所を助けむものゝ如くに見えにき。然れども渠が目を擧げて天上を見し時黒雲中の黒眼に的と瞬まれ、思はず腰を櫻端に仆しかけたり。遽然として「ウム」と展轉る主屋の聲に背を擊たれ重き足をもて遂に庭面を踏みにき。

清水閣より大谷の廟に詣づるものは、一たび必ず悽絶愴絶、人世の空なるに感傷

幻影

(二八)

せざむば經過する能はさる満目の悲觀を見む。實に此の鳥邊山は千年以來諸宗門の菩提所にして、舊時は今の大波羅も亦此壘域の北隅を形りきと傳へり。前後左右身邊を繞れる石碣寸地を争ひて列び立ち、或は高く或は低く、或は大きく或は小く、或は古く、或は新しく、人世の無常を多様多種に現はせり。蓋し人は猶ほ原頭の艸の芽さむとして直ちに食まれ、花さかむとして遽に踏まれ、茂らむとして忽ち刈られ、然して残りて霜に枯るゝものゝ太と少なるが如く、或は家庭の芽と愛らるゝものゝ春未だ到らざるに執られ、或は花を着け實を結ばむとする間に折られ、或は功成り名遂げむとして其夕に斃されつ、頭禿げ齒落ち、無爲にして化を盡されず。黄昏を扇くの微風は徐ろに其灰燼と落花とを散して、一たび誘ひ去りし哀情を再吹き回したり。

此の菩提所より牽き出されたる系の如き小逕の坂に、今しも半面の老顔仰ぎ出でたり。頓て其全身の上り来るや否、一たび深樹の裡に隠れて、再び柴垣の門前に顯はれたり。渠が枯野の如き頭に小さく結ばれたる白髮は、其身の女姓なるとを表はし、皺みし面の太と鄙びたるは、此都の人あらざるを示し、然して其着たる單衣の猶ほ棱角あれども太と古びたるは、渠が系譜、門地、生活及び過去、現在、未來、大凡其身邊を繞れる運命を語れるなり。渠は甚だしく疲れたりと見え、筇は滑りて手を離れむとも、兩眼は汗に曇り、足は曳かるゝ如くにして歩み、傾く背は屢々前に轉ばむとせり。然れども尊きは南無阿彌陀佛よ、渠は唯其呼吸する念佛を力ともて是處まで攀り來れるなり。

さるにても渠は何が故に此處には來れる。日暮れて道に迷ひし爲乎。或は其の幾くもなき身を墳墓の邊に近からしめむ爲乎。但しは舊都を覽るの次、觀世音を訪

西陽樓

(三八)

はむとて偶々茲處を過れる乎。抑も亦其愛するものゝ爲に世を隔て、哭かむ爲に來れる乎。渠は門に入らむとして入らず、腰を叩き背を伸へ、鎧を立てゝ少時目に餘る石人を見てありしが、忽ち顔皺み眉縮まりて泣かむとし、涙を飲みて咽び出たり。既にして又面を拭き遠近を視回して孫女は何處に葬られてある墓に詣つるものと知らば花を折りても來べかりし。故郷には孫女が植ゑつる桔梗も萩も美しく開てありしを。渠は猶ほかい搜り珠數取出て涙ぐみ忘れたりと思ひし珠數の缺にありし嬉しさ悲しさ。

渠は再び面を拭き、鎧を擧げて柴垣の門より入り、一線の小徑を夾みて立てる墓碣は前後より且つ迎へ且つ送り、殊に新に植てられたる處々の卒土婆は、渠を誘ひて迷宮の奥に曳没たり。老嫗は殆ど途方に盡き、櫻の子の墓と列びて二個ありと聞きたれど、量もなき此の墓田に孰れをそれとし識るべきぞ。夫の家は婢僕も多からむに斯かる處に我一個遣ると云ふとやはある。又佇立みて眼を閉ぢ、首を筋の頭に垂れて默念してありけるに、最と静かなる晚風の呼吸微かに稱名の聲を吹き送れり、面を擧げて遙かに視れば、幽鬱たる老松翠烟を罩めたるが下に、

陰約として人影見えたる渠は氣力を回復して急ぎ樹蔭に近づきたるに四十許りの艶婦新墓の前に跪きて、且つ懇に且つ哀れに念佛し居れり。老嫗は出でむとして躊躇へつゝ畏こき哀傷を途中に驚かさむは罪深かり。と、身を樹蔭に潜めて念誦の了るを相待ちつゝ熟々見て胸悸きア一個の新墓右左に列びてあるは、是が孫女等の墓ならずや。二個の卒土婆、二對の花、一人の手より手向くる渠は孫女に由縁のある誰ぞも。

婦人は側耳ふ人あり共識らず、卒土婆に向ひてうち怨じ、後世に殘るべき名譽の爲め功績の爲に死ずして、一青樓の爲に身を亡ひ玉ひしとの悲しさよ。學士どもなり博士どもなり、幾道の疏水を鑿ち、鐵路を布き、當世には恩人となり、後世には龜鑑となり、名士の魂を休むと云ふ首府の谷中に、幾万人に送らるゝ洪大なる葬式をどこそ思ひしに、知る人もなき鳥邊山に小き墓石を戴き、永久書生の儘に了りて弔ふ人も無からむとは。嗟乎惜みても惜むべきは御身の生命。——嚮に吾身に發心せよと勧め玉ひしかども、斯くなりては、復讐と云ふ大罪をこそ累ぬべけれ悲き哉。されど復り玉はぬ御身心靜に成佛してよ。

斯くて右なる卒土婆の前に進みて、喃玉子、吾婦よ。我は御身の來さる前に家を出でたれば、御身をば知られども、無爲き三郎を心狂ふまで暮ひしことの嬉しさよ。苟且にも妾が知らば吾家に呼びても、養ふべくよし三郎が正室には難くとも、側室としても許くへかりしを舞媛にして失ひしと如何ばかりの遺憾ぞや。何事も今は止みぬ。三郎が唯一個の未來の伴は御身願くば陸しく相慰めてよ。斯くして墓を列べてあれば、未知人とて縁なきものとはよも見まじと。渠は猶ほ兩三回づゝ念佛して、悄然と身を起して往かむとせり。以前より胸に溢るゝ涕涙と悲歎に抑へてありし老嫗は、樹蔭より歩き出て、呼び留めたり。喃少時待たせ玉へ。唯今阿玉と宣ひしが、阿玉が墓は是にて侍べるか。阿貞は驚き回顧りて、熟々老嫗を凝視り、問せ玉ふ如く。此方は玉子、彼方は吾子、妾は此の子の母なるが、御身は誰にて在し玉ふ乎。老嫗は聲を揚げて哭き倒れ、喃我身こそ阿玉の祖母なれ。阿貞は愈うち驚き、玉子の祖母御に在せりとや。婿の母婦の祖母墓前に於ける不思議の奇遇に兩個とも心情餘りて言葉はなく、流るものには涕あるのみ。老嫗は僅に自個に返り、今如聞れば、親の慈愛、僧の看經にも勝りて辱なき弔辭を賜はり亡靈如

何に喜びけめ。あはれ生命ある裡に、其一言を聞かしめばと、再び面を掩つゝ、辛うに孫女の墓に進み、より數回念佛したる後、阿玉よ。御身が呼びし如く。祖母は來つるに、御身は祖母を置きて身を棄てたる乎。御身の婚媾と聞きしより、門も鎖ぢあへず、人にも告げず、淨土に参らむものゝ様に百里の路も一里の如くにして上京りしに、圖らざりき出門の日が御身の命日、到着たる今日が第七日。今生の裡に見ることと喜びたる花婿の懷かしき容も、御身の美しかる花嫁顔も、慶事も、墓の下にならむとば。斯く云ひつゝ、轉び慟く老嫗の愁歎に、阿貞も自個の哀情を忘れて此の老ひたる絶望者の苦痛の爲に悲しみ、嫗を扶け起して種々慰め、さるにても玉子の結婚と宣ふは、如何なる事の情に侍るや。嫗は力なき頭を擧げ、さればとよ、逝る十五日の夜、吾身一個月を見つゝ假寐してありしに、孫女の姿枕頭に來りて吾身を喚ひ、妾明朝家の郎君に嫁くなれば、御身速かに來ませと云ひて忽ち消えぬ夢なりけれども、宿めは又顯れて疾く來ませと、三度まで吾身を喚ひぬ。三界に一個の孫女、年久しくなりし隔離、老ゆるほどに優る恩愛、尋常ならぬ夢兆の不思議、一時に誘ふ心の迷ひに、明日をも知らぬ老の身の、慶事の聲に呼ばれて孫女

の墓まで詣でに來ぬ。」

阿貞は痛くも感傷し、幾度か嗟嘆しつゝ實に然ることのありける平斯ばかり心の優しき玉子を、生前に見ざりしとの遺憾多さよ、相見ぬ吾身さへ悼はしさに堪えぬ孫女を、現在失ひ玉ひし哀傷吾身の心に比へても思ひ量らむ様もなし。老嫗は猶ほ嘘噏びてありしが遽に思ひ出ならるものゝ如く、三郎の墓前に稽首き、私の悲歎に没れて、白すべきとを忘れぬ、三郎となむ宣ふ君よ不肖なる孫女に憐情を垂れさせ玉ひしとの辱なさよ。猶ほも幼なき童女なれば甚深き君の情を弁へ得たりや曖昧なし。四歳の時より父母を喪ひて孤子となり、嫗が手に育ちたれば、禮儀作法、言辭舉止、君の心に副はぬとこそ多かりけめ。されども性質は最も優しく、年經れども親を忘れず。五歳の冬より一たびも忌日を守らぬ月とてなかりき。六歳より學校に上りしが他の小兒より勝りて手の巧ければ教師も好弟子となむ呼び玉ひき。深くも花を愛してければ、小かる庭を作りて萩、桔梗、女郎花など多く栽え、毎朝手折りて佛壇に奉げ、父母の木主の前をしも美しく裝りにき。殊に祖母をは篤く敬ひ一たびも逆ひしとなく、祖母が漸く年老ひて寒暑に弱く、

身衰へて生活に難むを勤きて、十二歳の冬途に其身を賣り侍りぬ——斯ばかりの孝行娘に侍れば、君をも敬ひ尊みしとは思へども如何なりけむ。されば嫗には唯一個の孫女よしや君の心に副はずとも、後世永く思情をばかけさせ玉へ。斯く云ひつゝ涙涙拭あへす再び阿玉が墓に復り、さりながら熟々思へは太と悲し、吾身七旬の齡を過ぎて、世には厭き、身には疲れ、長生して孫女の累となるとも知りつゝ、猶も生命を惜みしは、せめて御身の花期を見て、こそと思へばそ身の臨終になるとも知らず日を急ぎつるも、奉公を了へて片時も早く歸り來なば御身を待てばぞ。御身は世の奉公と云ふ苦しみの多少も知らず、神社に詣でむものゝ身を棄てたるは何事ぞ。昔時櫻子と云ふ一人娘の身を賣りし時、母は筑紫の窮處を出て、悠々も東都まで尋ね來ても逢はねば、其の子の名を縁にして筑波峰の麓なる櫻川まで迷ひ下りて心狂ひ、水に散りゆく落花を、掬網もて掬ひしとぞ聞く物に狂ふばかりかは、子の故には死もすべし。實に其母に再會の喜びありしも、

子の生存へてあればなり。おはれ御身も亦亡き人を悼まむ爲めとならば、如何様に容を爲すとも、世にだに在らば我は歎かじよしや髪を剃して深山の奥に遁れたりとも、我は尋ねて共に菩提の道に入るへく、思ひに病むで知死期にありとも、杖となり相者となりて未來に往かむは平生より願ふ所ぞ。婿君の如何に御身を思ひますとも、直に未來にまで召し玉はむとはあるまじきに、御身逝て我のみ残り、娑婆に哭きて消べきとを思ふこともなかりし乎。

實に、姫は今悲歎の靈に感じたらむものゝ如く、鬱によりて冷盡きたる情熱し來りて再び焰え凝れる脇沸き回り、乾れたる眼より混々として涕流れ、舌は小兒の如くに言ひ、身は抛れし蛙の如くに顛ひ然して其少き結髪は傷みて黙せる小猫の如く、頭に悲しく臥して居るあり、今まで其心を思ひやりて慰めかねたりし阿貞、是に至りて深く感激せる面を顯はし來り、再び老嫗を懷き起して勞はりたる後、其愁傷は妾も同し、如何ばかり悲しみますとも、死たるものゝ生還るべき様も侍らず。いざ玉へ御身と謀ふべきとこそ侍れ、茲處にて遇ひしは亡魂の誘びく所乎。玉子の勤めたりし家は、素妻等夫婦の樓にてありしを、良夫没りて其弟に管け

たるに渠其妻と相謀りて吾家を傾けたり。吾子も其圖謀の淵に陥りて斯くは亡びぬ。其夜玉子は吾子の故に心狂ひて、自ら井に投りぬと口に藉とも、事の情最ど曖昧しく、殊に此程其妻病み往々訝しき讃語を洩し、夜々玉子が沈みしと云ふ井に徃く事實より、世人は皆玉子は渠に誤られ、渠は其罪に曳かれて井に徃くものなりとか傳へり、祖母御よ、如何に懷ひ合せ玉ふとはなきや。

老嫗は此語を聞き、背も矯らむばかりに立ち、筇をば曲るまでに突きたり。さては阿玉は殺されたる乎。斯ばかりも親を慕ひ、祖母を思ふ孫女にてあれば、徒に死むとはあるべからずと思ひてしが、さては夫の心狂ひて身を投げぬと、我に告げたる女こそ、阿玉を殺せし鬼なりし乎。佛に似かよふ罪なき童女を殺すのみかは、人をば佛と思ふ嫗を欺くものは、よも人間の業にはあらじ。天魔よ、夜叉よ、殺すに如何なる罪ありしぞ。罪ありて殺せしものならば、何故嫗を欺きつる。閻羅は此世を見まさずや。斯ばかりの悪人をはなぞて地獄には執り玉はぬ。吁我如何にして怨を報む。御身願くば我が爲に敵を報ひてたび玉へ杖を忘れて蹠蹠ひつゝ、且つ怒り且つ怨みければ、左様に心を亂し玉ひぞ。我が爲にも子の敵なれば、此儘には置

くべからず。去りながら確乎たる實據もなきに世の風説もて罪を定めむと然るべからず。孫女が死つるとこそ最早第一の實據なれ殺されずして自ら死る阿玉にはあらじ。喃阿玉よ然にあらずや。魂魄あらば姫に告げよ。宣ふ所理あれど死者に口なし、生者にこそ實據はあれ。御身今宵彼家に宿りて主婦の動靜を察玉ふはり。必ず思ひ合せ玉ふ所あらむ。彼家に宿れとか酔き此姫に宿を許さむとも思はれず否とよ苟且にも其罪を掩ひ疑念を絶むと思はり。必ず御身を好待すへし。御身をよくするど不ると是も亦一個の證據と思されよ。實に然なり。御身の言吾身を命へぬ。去らば直ちに是れより往かむ。とて滑るが如く走り出るを阿貞は呼び止め。待たせ玉へ猶ほ告すべきとあり。主人の妻も奸物なれば悟られぬ様心し玉へ。吾家は東陽樓と稱ひ。彼家の東方に對へる三層なれば太と識れ易し。今宵意得玉ふとあらば明日早く訪はせ玉へ。老嫗は聞き改しもせず、一一記憶に疊みたる思にて別れを告げ、以前の門まで復り來り筇を留めて歎息し。孫女は殺され白髪の祖母が孫女の敵を討たむとは如何ばかり淺ましき世ぞ。

## 第八 西陽樓

其一 玄關

少年の不思議の溺死、少女の奇怪なる入水、兩個の非命の同日にして起れると、此三條の不祥の珍事は忽に西陽樓の常夜燈を曇らしめたり。日ならずしてまた主婦病み、其病床の夜の怪異きより、遂に阿玉の幽靈出てぬと相傳ふるに及びて、昨日迄車轍馬跡市を成したる門前も遽に寂び、多かりし婢僕も、夫の儀助と一個の家婢とを玄關と厨房に残して前後に去り、流石に廣き建築も、宛然陥りたる城郭に似たり。最初の間は後れ至る二三の兵兒が遺れる捕獲を搜さむるものゝ如く、偶々幽靈を見むとて来る好奇の徒なきにしもあらざりしかども、今や全く蹤跡絶え、日中には主婦の顔蒼く肉落ち、髪解け、衣掀起て、渠自身幽靈に似かよふ形影往々にして廊下より主室に出没するの外は、寂然として終日日影の庭を亘るあるを見るのみ。日暮れは樓上の鬼覺門前の垂柳にすら心の懸かれて、行人は皆軒下を避けて去來し、奥室には妓女、童女等處々の闇に頭を聚めて、人を恐るゝ鼠群の如く、潛々相往來して此の頃の怖るべき夜を過したり。

日は暮れぬ。手管儀助は玄關にありて訪ひ來ざる客を待つに倦み、漸くに睡を催す。

せり。一個大なる裏を懐ける家婢。今しも廚房より出来りて、渠が前に立ちあから。夕餉すめば早や睡りぬ。起てよ。起てよ。睡眠公。恍惚公。疾く起きずや。儀助は眼珠を摩りつゝ空々しき顔を擧げ、朦朧せる瞳子を轉し。誰ぞ恍惚公とは。御身のとよ。乃公が何時悦けたるぞ。傭き人よ。何時妾の後任は来るぞ。乃公が何時悦けたるぞと。焦てる家婢は愈焦ち。恍惚よ恍惚よ。大恍惚よ。玉子が井に沈みし朝、御身を喚び起しつるに。御身は痴けたる顔して可憐情夢を覺されたり。とて長き欠伸を吐きたるとを忘れしや。夢を説く處かは、玉子が井に投りぬと云ひしに井に何爲て居ると譖け。玉子は井に陥て死ぬと、耳を貫くばかりに叫べば、蝸牛の角を出さむ様に兩手を延べて、復た欠伸し死たるものをして如何にする。疾く起きて救はずやと云へば玉子となれば乃公も死なむと。大欠伸して涙ぐみしにあらずや。儀助は口を開きて欠伸し曉々しき女の口よ飲餘の壘振る様なり。空言は聞かずも宜し。更代の女は何時来るぞ。何時なりとも来る時來べし。御身は今日來ると云ひしにあらずや。幽靈の出て、隠れて、日の出るまでは今日なり。さればこそ恍惚公と云ふなれ。幽靈の出るまでこの廣き寂しき家に、豈で一人寐らるゝものぞ。一人にて寐れずは

乃公と二人一處に寐よ。御身と一處に——誰がよ。誰がよ。一刻を争ひたる家婢も、今や幽靈談の幻質に誘はれたりと見え、忽ち眞面目の顔になり。主人夫婦は斯る時こそ一處に寐ね玉ふべきに、主婦の寝處を隔て玉ふは何故ならむ。童女等の云る如く、幽靈の出るとを主人に知らせじとの心ならむ乎。否乃公の聞く所は異なり。主婦は他の美しき幽靈と寐に往き玉ふとなり。然して主人は此ほど毎夜枕に刀をば置き玉へるは、幽靈の出るとの主人に知れしならずや。然なり。其美しき不義の幽靈を殺さむ爲となり。家婢は儀助に弄ばれて再び焦き立ち、無益の人に戯ばれて、時を移しぬざるにても今日來るとて未だ來ぬは何故ぞや。是も御身の虚言なりし平。宜し來るとも來ずとも、我身は是より下るべし。然らば、待てよ。待てよ。今にも更代の家婢は來べし。否何時まで欺かれて居らるべきぞ。よし虛言ならぬにせよ。今夕鳥邊山に詣でし玉子の姫刀自必ず再び此家に歸り來む。頓て歸り来る頃なれば、更代の人の來ずとも吾身は去なむ。ソレソレ見られよ。姫刀自の門前に來れるあらずや。

復讐の望の爲に老て益壯ならむとする姫刀は、今も西陽樓の門前まで復り來れる

なり急たれども初夜にはありぬ確に此家なりとは思へど。家婢は裡より此家復よ、此家よ、傭刀自疾く疾く入來ませ。思ふ所違はざりし平孫兒を懷へば懷かしき此家敵を思へば怨めしき此の家。——許させ玉へ。如何ばかり傭御を待ちしよ妾は是より暇を乞ふものにしあれば後事は便宜に御身に囑みなむ頓て更代の家婢も來べし御身は您々此家に休息せられよ儀助主然らばまた家婢は裏を懷さて遁るが如く馳せ出たり。

## 其二 病牀

主婦の阿國は阿玉を井に投せし次の夜より心地悪しとて童女等を樓上に移して自ら其室に起臥しぬ渠日中は昂めて身を顯はし用なき事を指揮すれども夜に入れば悽からむ迄廣かる室に燈火を掲げ心を張りて獨り寐たり固より人の来るを厭ふが故に唯主人のみ往々訪ひ慰むるとありと雖渠も亦僅に夕刻の一時間経るのみにして一たびも初夜を過せしとあかりしに今宵は何等の所用やありけむ密談低語に夜を深かせり。

主人我も初めは有ゆる事情を白して阿貞に懲悔し三郎の爲に紀念碑を建て阿

玉の爲に法會を修して渠等の亡魂を慰めなばと考へしかども今にして熟々思へば何に事も無益に似たり。主婦さらば御身も全然決心し玉ひつる乎。今日まで妾が心を苦しめたるは是事のみ喉にある食餌は吐くよりも呑むこそ易けれ呑むで口たに漱ぎ玉は、誰が何を呑みしと知らむ願くば今の決心を終まで維ち玉へ必ず再び翻し玉ひそ。妾の冀望は唯是のみ然なり今は唯御身に心と力を協せて此事を就さむ外に術なし。御身も昂めて心を振作て速かに自ら癒ゆべし嚮に御身が神經にて自ら死しを哂ひつるも亦此謂なり。縱令此家を得たりとも斯く賓客を失ひては何かせむ。今宵にも醫師を迎へむは如何。阿國は懼然として良夫を視努にも醫師とな宣ひそ。心の病に醫師は用なし。妾には御身の決身に勝る良藥はあらじ。妾は形に從ふ影なり。御身だに心強くば妾が病は日ならずして平癒む。

偶々廊下の遠き處に聲ありて「主婦」と呼べり。主婦は呵るが如き聲にて儀助乎、吾身に何等の所用がある。玉子の祖母再び來りて宿を乞へり。如何にすべきや。此家に宿を乞ふとか身分知らざる老嫗なり。御身痛く恥しめて歸すべし。五分は止

## 其三 南閨

めて否々渠を拒むで疑念を懷しむるは宜しからず。——御身便宜に待ひて空たる室に伴ひ阿玉の閨なりと云ひて寐ませよ。努情なくな遇ひそよ。されど渠は主婦の病を看護らむと願ひ出でぬ。主婦誇き老婆よ看護婦は用なしと傳へよ。

(九九) 樓陽西

儀助は去れり。其足音は微かになれり。隣室は寂として聲なく自個の入り來りし障子も亦密と口を緘てあり。燈火は暗き眼を射ぬきて日光を仰くが如く滑りて澤ある疊、明光を反す金色の壁、南天樹の牀櫈等見るものとして眩ゆからぬはあれば孫女の室と聞たる渠は漫ろに王公貴人の偃息せる妓女の閨の古畫など、昔時見たるまゝ思ひ出て、此閨に起臥しつる吾孫兒の如何に尊とかりしをかと思ひ、足伸べて休むとすら憚かり居しが不圖床間の女郎花の懸繪を認めて懷しくも亦悲しくなりて涙ぐみ斯かる位高き身になりても猶ほ故郷の花を忘れざりしか、それを懸けたるまゝに捲きてあらぬは我を泣かせむ心かも。

斯くて老母は身を起して襯を推し、蚊帳と夜具を取り出して夜具を布き、其文彩を見てまた嗚咽び翼を比べし雙鴛鷺。孫兒等も此褥に睦まじく、——ア、唯七日速かりせば、——實に七日以前の夜は寡婦となりて寂しく寝しを此の夜具にて、然なり、然なり、遡りたる血の痕なきや、囊裂きたる歯の迹なきや、脱け散りたる髪毛はなきや。ア、此七日が現世來世の境なりし乎。其時に我だにあらは徒らに死せまじきをよし盡る命なりとも祖母が代りて死ぬべかりしを夢の如く過ぎて

返らぬ、さても一週間の遺憾さよ。——嚮に婿の母の云ひつる如く、病の看護を許さぬ外は事と我を好遇して、我が願ふより先に我を此閨に導かしむるも證憑なり。疲れたりとも、今宵は寝ずして家の動靜を察はむ。

斯く云ひつゝ身を褥に横へけるが、疲るゝとの甚だしければ、知らず、識らず、目瞑ち唇合ひ漸くにして、財延び手も弛みて、遂に眠に沈みたり。然れども其閨其夜具平生に異なり、心も亦張れる故にや、一二時間寝みたる後忽ち覺たり。實に渠は今覺めたれども、不時の目覺に、胸悸き、心搖きて暫くも安からず。目を瞑ちて徐ろに過去現在より未來を観じて、眞個に怕るべく思へり。我身世にも稀なる七十の齡を受けながら、善根功德一粒の種を持きたるとなきが故に、如此にして死るだに、今世の罪のまゝに再生すべき後世の最と怕ろしきに、假に敵を報いむと思ふ心の淺ましさよ。よしや怨むる其人をば、黄泉に遣りたりとも、孫女を伴ひ還るべきにもあらず。消息のあるにもあらず。吾腰は是まで重ねたる罪の重さに曲れるに猶ほ此上に例少なる咎を重ねて、久しく娑婆に苦しまむより。賴める國に疾く往生して、孫女に遇はむには如くとあらじ。南無觀世音菩薩速かに吾身

を淨土に召させ玉へ。

老嫗は起きて懺悔文を誦し、稱名を唱へ丁りて再び寐むとしつゝ、最と小き足音漸く近く、漸く高くなるを聞けり。耳を側てゝ偷聽へる間に、音は愈近つき來り、遂に此室の闕に留り、徐ろに障子を開き、美艶しき少女の姿静かに入来て、赫ける明かりの側に坐りたり。嗚呼、渠が此家に尋ね逢はず、鳥邊山に訪ひて其墓に怨み、遂に未來に追蹤かむと欲へる孫女の阿玉にてありしなり。阿玉は蚊帳を隔てゝ呼べり、祖母御は覺めて在せりや。燈火に映りて輝く綠髮愛の海を湛ふる額、美の靈を宿せる眼、穩かな眉、苔める唇、光れる頬に満てる歎、豊かに垂れたる舞衣の袂、帶の間に挿みたる金扇、而も兩掌を膝に合みつゝ嬉しげに微笑む姿、此世の物とは見えざりき。實に渠は此世の物と見えねど、然れども亦微しも妖しき容はなく、燈火は明かに其衣を照らし、陰影も亦鮮かに其形を寫せる様にてありき。蚊を匍匐出でたる祖母は、仙化したる吾孫兒の餘りの尊とさに近づき得ず、恍惚として看とれてあり、遂に歡喜稱嘆の餘思はず念佛を唱へつゝ、隨喜の涙に溢れたり。阿玉なる乎。實に實に、御身は猶ほ生てありし乎。御身の死きと聞しより、先刻

墓處に詣でしに嬉しや猶ほも此世にありし乎。孫女は痛く驚きて又微笑み不詳のとを宣ふよ。祖母御の世に在せるに豈で吾身が「ヲ、我も今まで然か云ひて怨みて來つるにさては晝のは夢なりし乎。我のみならず婿の母も共に在り、墓も卒土婆も確かに一對並びあり。我れも其處より此の宿には來ぬ。不思議、不思議但しは茲處ははや淨土平御身の美くしき容を見るは彌陀如來を見まつるよりも嬉しきぞや。孫女は益々怪しみて「宣ふ所吾身には微しも解らず、郎君こそ一たびは失せ玉ひき、一たびは失せ玉ひしかども、再び蘇回り玉ひたれば今は吾身郎君と共に在り。何處に吾身は今美しき花園の邊にあり、然れども、そは祖母御の知りまさぬ遠き國なり。」御身はまた如何にしてさる遠き國に往きつる。「そは吾身も知り侍らず過つる夜此家の主婦、明日吾身を郎君に嫁らせむとて、然なり、我も其婚姻と聞きし故にこそ來つれ。而て其後は、主婦は吾身を心狂へりとて、其夜好く眠りて癒ゆべく催眠剤を授け玉ひき。吾身は其を飲みたる儘眠に就き、夜半に身冷えたりと思ひつゝ、目覺ればはや郎君の許にありき。今は憂苦も艱難もなく、歡喜快樂に日を送りぬ。されど猶孤獨寂しく在す祖母御の忘られねば、郎君に白して、

御身を迎ひに來て侍り乞來ませ吾身と共に、孫女は先づ身を起して出むとす。既に已に死ざる孫女の容に、醉に浮かれたりし祖母は、樂しき國より孫女を迎ひに來しと聞きて、身も心も飛ひ立ちて待て、待て、帶を束めむほど。とて跡を尾ひ、急ぎ障子の外に出たり。障子の外に出れば、阿玉は何處にゆきけむ、一道の複道、此方より彼方の端まで耿々と照る燈火の裡、朦朧たる形さへ影さへなかりき。祖母は再び夢路を攀ぢるものゝ如く、茫然として立ち迷ひ、疑ふとを知らぬ信心現象と幻影とを判ち得ざる精神の疲勞とは、相合して幻影を現象と思はしめ、阿玉「阿玉」と呼びゆく聲は凄くも室より室に震ひたり。

## 其四 北闕

二十餘個の妓女、七八個の童女等は、毎各燈火に室を委ねて、初夜の比より北隅の廣き闕に圍繕したり。是は阿國に襲きて妓女の首となりし玉藻が室なり。渠は此頃の寂しき夜を賑かに過すべく、夜とに衆妓を呼聚へ、衆妓も亦凄き時間を縮むる爲に此室に集まり、世に幽靈の有や無や、精魂の出る所以、神經と妖怪との交感如何等學者博士すら頭腦を痛むる難問を論じて、玉藻に會談の牛耳を握らしめ

たれども議論の結ばるべくもなければ、夜々同一の談柄を復しつゝ今宵に及べり、時は既に夜半近けれども渠等は未だ止むべくも見えず。今しも玉藻が側なる此花顛はむばかりの聲音にて然なり。幽靈の始めて出づる時必ず其衣に憑るとは信なり。玉子の幽靈も初め衣に憑れりと云ふ。其葬式の夕、主婦は菩提所より歸り來りて、主室に入らむとしつる時薄闇き面前の壁の額に玉子の幽靈の顯はれたりを見忽ち聲を擧げて氣絶しぬ。頓て主人に扶け起されて再び其壁を見てけるに幽靈は疾く失せて、玉子の舞衣の懸りてありき。是は日中に乾してありしを主人の收入れたるものなりき。其時主婦は如何なれば斯る用なき物を以て、妾を驚かさむとは爲玉へると甚しく主人を怒りて、舞衣を寸斷きたりしが、幽靈は其夜より主婦を襲へりと。

玉藻そは正しく心の故なり。窓に玉子が井より揚げられし時、主婦は眞青に色蒼さめ、遙かに立ちて且つ來り且つ去る様太と怪しく思はれしが、さては其時亡者の容の眼中に彫られしならむ。白妙去るにても死骸を見しものは限もなきに、主婦のみ獨り玉子を恐れ、主婦のみ獨り幽靈に襲はるゝは、故ありげに思はるゝな

り。此花其事よ。今は四十年の昔、吾郷に好き武家ありき、父没りて世子なれば其一人娘に婿を迎へぬ。然るに娘には疾く誓へる情人ありしかば、病に托言せて漸やく婚儀を遷延せり。其情夫は閑外なる禪門の弟子にして、母も暗に其娘の戀を許せしものにや、渠は往々其病牀に情夫を呼びしそとよ。婿は情ある性なりければ、其妻は他に與へても、其家を繼げば足れりとて。久しく問はずに、黙過ぎたりしが、或日主家より公退る途上にて、其妻の不義の爲に痛く同僚に罵り責められ、絶交せむとまで辱められければ、今は力に及ばずとて、即夕人知れず家を出でぬ。其夜は恰も今宵の如く風凄く月澄たる夜なりきとよ。渠は人なき河邊に下り玉露散れる艸を布きて古刀を磨ぎ、頓て戸々の燈火の消ゆる頃、潛かに歸りて邸後に忍び牆を鑽りて入る小法師の跡を追蹤て、轟地に闇に直入み、一刀に妻を斬り、顧みて法師なれば、長駄て闇外に追ひ及くや否や、月光に血刃閃めき。法師は絶叫びて兩断となりぬ。當時より婿は本心を喪ひ、音調、態度、全く前日と異なれり。其人は今猶ほ在り、妾も能く其人を識りてあるが、其喪心は老ひて愈甚しくなれり。此物語の了るや否、白妙は其語尾を承けて、其類吾郷にも之ありて、妾親しく見聞

さたり吾郷は縣道に沿へる村にして、中央に一戸の逆旅あり。主人は四十餘の寡婦なり。壯き時熱を病めきて前髪は皆脱け盡きてありしかば、前面より見れば尼に似たれど、背面より見る時は猶ほ後髪の疎らに残れるより、闇夜に幽靈と見えしこと屢々なりきと。其姿の凄きに似て慾心も亦深かりしかば、宿る客も亦漸くに少になりしかども、一個の生活なれば欠るほどのともなかりき。其頃此家の遠き親戚なりとて零落て寡婦を頼み、朝夕門前を掃く男のありしが、寡婦の待遇の酷きを怨み、或日家を出で、再び還らず。寡婦は寧ろ心に喜び尋るとも爲ざりしが、六七日の後、縊死ありと喧しく傳へければ、妾も人後に隨ひて往き見たるに、實に其逆旅の圃と、其後なる寺院の墓所とを隔へる牆の上、蕃る柏樹の枝より枝に帶を聯ね、逆旅の後庭を睥みつゝ懸りてありしは、「其男」然なり夫の門前を掃ける男にてありしなり。一坐慄然として膝を進めて互に密着きて、さて其後は「其後間もなく帶は解かれ、死骸は仰され即日其墓處の一隅に埋められ、尊き經を讀まれしかども、猶ほ執念の霽ざるものと見え、寡婦は亡者の初七日の夕、霏雨降りて空僧は微茫に明るき頃、其男の縊れし垣を越えて、宛然見えざる靈に應ふるものゝ如く、  
「ヲ」と叫びつゝ、其墓處の邊を徘徊し、順て對方の垣を破りて外面の野に出で、「ヲ」と叫びつゝ、遂に其所之を知らずなりにき。其時の縊首の顔は、今も猶ほ明々に吾目にあるなり——されば主婦が玉子の亡魂に惱まさるゝとも、的に怨を受けたる故ならむ。」

如く「ヲ」と叫びつゝ、其墓處の邊を徘徊し、順て對方の垣を破りて外面の野に出で、「ヲ」と叫びつゝ、遂に其所之を知らずなりにき。其時の縊首の顔は、今も猶ほ明々に吾目にあるなり——されば主婦が玉子の亡魂に惱まさるゝとも、的に怨を受けたる故ならむ。

畏るべき兩條の幽靈譚に、閨は眞個の幽靈の過ぎゆきたる後の如く、深として潜みかへれり。此花は先づ口を開き、妾は彼夜實に怪しきものを見たり。「玉藻何を」其を妾語らまほしく思へど、今語らば、吾身に如何なる禍の來らむも測られず。一坐は渠を強ざれども、猶ほ渠が何を云ひ出むかを待てるが如く、皆其顔に視線を聚めてありしに、此花は遽然として色青ざめ、御身等今何をも聞かざりしや。微かにゆる聲するのみ、乙妾は自個の動氣の外は、玉藻は此陰氣を拂はむとて幾分の微笑を裝ひ、語調を裕かにして白妙に向ひ、さらば御身も平生玉子に情なかりし故、障子を開くる音せざりしや。室は皆呼吸を絶ちて暫時耳を傾けたり。甲「燈火の焼主婦に怨を叛いし後、幽靈は御身を訪はむ、白妙は御身こそ、此間も玉子を托りて屢々泣かせたれば、吾身より先づ御身にこそ、玉藻然なり。此裡にて玉子の敵ならぬ

もの一人もなければ力を協せて幽靈と争ひてむ。此花は再び制めて今確かに物音しき。群は再び静まつて凝聽きたるに、一時の鐘の聲隱々として窓より入りて、陰氣を室に打満たり。此花今は一時やがて幽靈の出る時あり。玉藻御身は幽靈の時を知れるにや。否知られども今頃ならむと思ふなり。白妙否。御身は何事をか知れるに似たり。御身は幽靈を見しにあらずや。否一坐淒然として此花の答を待てり。

颯然として障子開き、異形立つたり。幽靈、一群狂亂して隅を争ひ頭を埋め、氣を絶ち、息を屏めて、彌上に相重なり、死骸を堆積せるが如し。

闕の外に老嫗は呆然口を開き、「ア、ア」と呼ぶのみ進みも得せず、退きも得せず、云ふ所も知らざりしが、辛うにして吾身は阿玉の祖母にして、幽靈にも化物にもあらず。唯今阿玉に誘はれて室を出しが忽ち阿玉を見失ひぬ。若し御身等の裡にもや、群は益懼れ戰ぎ、幽靈、幽靈と隅々に洩らしつ、應ふる者なかりしが、堆積の下より白妙の聲して「玉子は樓下の主婦の室なり、疾く往き玉へ、疾く疾く、玉子は樓下の主婦の室なり」。

## 其五 病室

老嫗は痛くも人を驚かしたりと思へば憚りて再び問はず、樓下の主婦の室と聞きたるまゝ拘欄を曲り廻路を旋りつ、路窮りて梯子に出でぬ。渠は辛じて梯子を下り、再び廻廊を経て、茲に一倍明かるなる室に行あたれり。障子の裡宛然暴風の過ぎたる後の如く、何となく穩かならず見えたりしが、忽然として巨人の影、障子の上に躍り出でたり。老嫗は愕然として夢覺たる心ちしさては嚮に見たる阿玉は幻影にてありけり乎、畏ろしやさしも優しかりける孫女が、斯ばかり巨大き怪物とはなりける乎。渠は猶ほ熟視たるに其影の腔の太と脹れてありければ是こそ日中に見たる主婦なれ、心を病みて舉止怪しど聞きしは此謂なり。來我萎れし眼を刮りても、其動靜を察て證憑を得む。渠は檻の根に身を屈めて裡を窺へり、影は左手に壺を出し、熊手の如き右手を擧げて頻りに招き、疾く來よ此處に、疾く來ずや。三郎は蘇回れり。明日御身をは嫁らせむ。左様に心狂ひては能ふまじきぞ。此の催眠剤を飲み安く眠りて疾く愈えよ。老嫗は意外の所見に益々驚き、ア、壇壺睡眠剤——そは如何なる鳩毒ぞ。孫女が飲みしも、——然あり、今も斯くして孫女に

風は時々樹葉を戰がしめ、噴水をば前後に搖りて、其聲を且近く且遠からしめつゝ涼しさ過ぎて、凄き夜なり。老嫗も亦庭にいで、其後を追蹤きつゝ腰を伸へて其所之眺めたるに果せる哉。遙かの向ひに轆轤井の軒隱約と老眼に見えわたり。

## 其五 主室

主室には主人五介戸の開く聲に目覺めぬ。渠は障子の月色を見て身を起し、耳を傾け外より來れるものを窺かひしかども、庭前の噴水の外に聲なし。渠は枕頭の壇を握り壺に傾けて半ば飲みはや。幽靈は病牀を襲へり。吾妻我に匿さずば、直ちに往きて逐ふべきに徒に其出来るまで待つ心の長さよ。夜は太と闘けたりと覺ゆ。今は盜者の機を察る時、殺者の刀を握る時、謀者の私語く時なり。魘鬼の夢を襲ふ時、死の使者の来る時、幽靈の墓を出る時。渠は坐上の守刀を把りて嚮には我も善人なり。斯る静かな夜半には、身を忘れ世を忘れて安く眠る人にてあり。一旦妻の美舌の爲に心中の城郭を破られしより、方位もなき荒野に迷ひ、夢も眠らされて、惡靈と夜を共にするものとはなりき——去ながら佛となるも

飲ましめむとするなり。ア、ア、渠も亦其を、其鳩毒を飲むよ、飲むよ。ア、牛の如き大口を開けて舌を鼓して甘しと云ひ、御身も共に飲めと云ふなり。是はそも如何なる天魔の所業ぞ。裡に影は猶ほ手を擧げて招き「好兒よ疾く來て之を飲め。さては來ずとや。宜しさらば捕へても飲しめむ。老嫗は殆ど愕然呆れ、ア、ア、遁る者もなきに猪の追ふが如くに追ふよ、遂に捕へたり見え、頸を攫みし心にて燈火の側に来て坐りぬ。影は壺を空に擧げて來飲め。疾く、疾く、好くる飲みたりはやも眠る乎。斯てこそ心安けれ。來吾身媒介ちて三郎の許に遣るへし。老嫗は口に掌を掩ひて齒を噛み、さては斯して藥を飲ませ、醉はせ、眠らせ夢中の孫女を井に投げし平。天魔よ、夜刀よ、鬼よ、蛇よ。影は遽に障子をば暗く蔭ひ、直ちにまた巨人社なり漸く縮まとび視回して竊かに主室の方に歩めり。老嫗は脊骨の折れむばかりに突立ち、宜し渠が孫女を懷く如く、我も井に渠を懷かむ。音を忍びて跡尾けゆけば、主室の前にて一扉の戸開かれ、主婦は竊に庭に下りたり。外面には廿二夜の月屋上の一角に吊りて日中の如く庭を照し、餘光は主室の障子に白く印れり、露を帶びたる微

影 幻

(二一)

人、鬼となるも亦人なり。惣ひに懺悔と破戒と兩個の車に兩脚乗せて身を割かれ  
むより。思ひ決つたる道こそ踏まめ。縱令ひ夜は闇く山峻しくとも、我は無所畏の  
劔を把り、忍耐の帶を束め、吾妻と提挈して攀づべき峰まで攀ぢて見む。と壺を擧  
げて飲み盡し、我世に在る事三十年、以前の三十年は聞きて知り、以後の三十年は  
推して知る。人生九十、百年の間、人は徒に愚を守るが故に亡び謀なきが故に敗れ  
ぬ。残ひ殺して天網を脱れたるもの、盜み暴びて世を安く終るもの、不正の富、不義  
の榮華を最後まで極め盡して、床に死ぬもの、天下滔々皆然るに、我一個などで然  
らぬ。——さりながら恐怖、絶望、良心の呵責、頭脳の煩炎交る、攻め来る苦痛と  
其を拂はむして度を過す酒の氣力に頓て身も心も破裂なむ。——今撃つ鐘は三  
時、四時は黎明、早や幽靈の還らむ頃なり。

渠は今刀を脱きて膝上に立て、今一度壺に酌み一呼して喉に下し。未だ壺を置き  
あへぬ間に、看よ、七日以前阿玉の影の寫りし障子に再び女人の影寫れり。幽靈一  
劍芒一氣に外に飛び、手は半ば障子を貫き、犠牲の生血は飛霞の如く紙上を打ち  
「アッ」と腸を断ちたる絶叫に影は倒れぬ。

西 阳 樓

(三一)

五介は蒼皇て障子を開き、天を仰ぎて驚愕しそう阿國なりし平誤つたり。幽靈とのみ  
臆ひこむて、妻を吾刃に懸けたる平許せ、我も共に逝かむに。渠が刀を脱むとする  
手を、阿國は確と握りつめ、怨恨満ちたる眼を瞬りて良夫を睨み。御身——御身、御  
身は吾身を——吾身は此儘死もせむ。御身に願ふは死ずに此の子をと力なき手  
を伸べて胎内を指したり。五介は轉た太息を發し、止ぬる哉、胎内に刃徹れり。胎兒  
の刺されたりと聞きて、妻はさも遺憾げなる息を吹き、「ア」と叫ひて目を瞑ぢた  
り。五介は再び聲を勵ましやよ阿國、今一度心を持って呼吸ある間に稱名して罪を  
滅ぼせ。疾く掌を合せて佛を呼べ。此世の旅行は茲に盡くとも、前路には盡きぬ世  
あるぞ。未來には見えたる罪見る鏡のみかは、發はさる辭を聞く耳あり、意はぬ心  
を喰ぐ鼻あり。此世こそ觀をも飾れ、未來には無衣なるぞ。其處より再び還るべか  
らず、其處にては再び死ぬぞ。我が刃を抜く前に、疾く掌を合せて念佛せずや。阿國  
は最後の眼を開き、百方其手を擧げむとすれども手は既に力盡き唇を動かせど  
も唇も囁嚅るのみにて語を成ねば、五介は竦然として面を背けて、酷しき罪人の  
末路よ。と渠は手づから妻の手を握りて合せ、懷き抱へて西方に向はせ、猶ほ耳あ

らは能く聞きて我が口に心を合せよ。光明遍照、十方世界念佛衆生攝取不捨。——  
阿玉を亡ぼしたる其障子に自ら亡ぶも定まりたる業因乎と太息して刀を抜け  
ば阿國は既に死骸となれり。

刀は猶ほ五介の手にあり血は淋漓として手より垂たり。渠は其血を拭かむともせず半身既に罪に伏したり。残る半身も其血を受むと手に在る刀を熟々見て尊どき太刀よ爾は吾最愛の妻を刺して吾罪業の根を断ちたり。爾は尊とき彌陀の利劍乎。我か最愛の妻子を殺せし罪は即罪なれども此罪ゆゑに短き無明の闇界を離れて永劫無窮の明界に出たる心の爽然さ。——如何に三郎御身が詛焉に倍蓰したる此慘状を見て怨を露せ。阿玉が敵も報はれたれば亡魂も成佛せよ。來疾く逝て半身に遇はむ。刀閃きて喉を断ち渠は斃れぬ其妻の死骸の上に。

是まで扉の外に窺ひたる老嫗は、眼前二個の生命の絶ゆるを見て、孫女も、敵も、身をも忘れて、生ながら修羅道に陥たるかと思へり。渠は劍の動くごとに、全身氷の如くに冷え、唯一の活力なる念佛すらも、疾く其口より遁れたり。阿玉を亡ぼしたる障子。阿玉が敵も報はれたれば、此語を渠は渠は聞しや不や。主婦死に、主人斃れし後を呼ぶに至りし迄には猶ほ多少の時を要せしなり。

## 其六 主室

西陽樓の相續者の没後。第七日の次の曉暮奪者夫妻は自ら滅べり。其日宿直の警官三郎か母、東陽樓の主婦阿貞、阿玉が祖母阿啓、西陽樓の手管儀助、玉藻、此花、白妙警官の請求に應じて其見し所の概畧を語り了へたる處にして、人々は皆之を聞きて全身に毛髪竦れり。

警官は枕頭に轉べる壇と壺及び襷を浸せる紫液より聯想して、其催眠劑とは即ち此葡萄酒なるべし。實に阿玉が死骸を檢へし時、鳩毒の痕迹見えざりしも、是故なり。阿玉が死狀の怪きと、阿國が故あくして神經の錯亂せしと、平生にも似ず医師を恐るゝと、疾く偵知せられてありしが、此家を圍繞める疑團今は漸くに霧

むとすなり。阿玉は既に心を喪ひたりしを猶ほ此狂者を失はずむば能はざりし  
は、其密計の渠が耳に洩れたりし故ならむ。結果より原因に溯れば事の情判然と  
して掌を指すが如し。されど此は唯證憑の影あり。他に其の形を認めたるものは  
なきや。斯く云ひて渠は列居る妓女等に目を注けたり。玉藻は竊に此花を催し、御  
身が當夜見たりと云ひし怪しきものは、白妙何等かの證憑にはあらずや。三十餘  
の視線は忽ち此花に向ひて注けり。警官見し所あらば藏さず語れ。藏さば政府を  
欺く罪あり。此花は罪と聞きて連れむ様なく畏れ顛へる口を開きぬ。

「玉子か身を投げたりと云へる夜、妾は情人の爲に煩悶ふとありて、闌るまで眠を  
就さゝりしかば、情の憂を遣らむとて、一個起きて窓を開きしに、外面は夏の夜な  
がら太と凄く、暑み亘れる空の月宛も秋の夜の月の如くに汎え、風は絶えず中庭  
の松枝を振ひ、噴上の水を散し、池面を搖かして波を立てつゝ、往々窓より吹き入  
るは、冷冷として肌を冷しき間もなく月は雲に隠れて、庭前看るゝ闇くなるや  
否、太と微に水面を撲ちぬと思ふ聲しね、訝りて池面を見たれど、朦朧なる雲間の  
月の波上に碎くるのみにて、魚の躍りしものとも見えざれば、妾は其儘窓を鎖さ

むとして、今一度視回せしに、忽焉にして井の傍に人影立ちにき。偶々一時の鐘響  
きて、影は靜に此方の庭を經て主室の方に往むとしつ。警官、そは阿國にてありし  
ならむ。然なり妾も主婦ならむと思ひてしが、其人の戸に入る時再び照りたる月  
影に的ニ主婦と認めしり。

警官宣し、今は事皆明白なり。唯此一事のみにあらず、檢屍の際、四時間許を経たる  
ものと云ひたる醫師の語に對照して、一時より五時までの時間の符合したると  
によりても、阿國が阿玉を投ぜし事實明かにして掩ふべからず。如何に世を欺か  
むとすとも、天豈其目を隠さむや。さるにても憐むべきは五介なり。渠毒婦の手に  
相れて身を擧げて失ひ畢りぬ。されど其の九死の妻に懺悔せしめ、自個も亦悔改  
めて亡びしを見れば、遂に悪人にあらざりし平檢屍は畢みぬ。阿貞、便宜に葬り得  
しめよ。斯く命じて渠は退れり。

警官が去りし後亦肅として栗氣立入り。此花、玉子と主婦は、闇にも誤り見む由は  
なきに、如何に昏迷の故とは云へ、其を玉子と見えしめたるも不思議なり。白妙加  
之ならず、夫其妻を殺し、親其子を刺すとも尋常ならず。儀助、主婦は唯此頃まで主

影 幻

(八一)

人が玉子を寵むとて、日とに主人を怒り、玉子をば懲してありしが斯くなりては空の空なり。老嫗は此時までも猶ほ戦ぎてありしが吾身年老いて餘命もなく、淨土の道にこそあるべき身にして、眼前劍山を見るのみかは禮拜の掌も合はず、念佛の聲も發ず、生ながら地獄に墮むるに臨終に逢ふと如何ばかり罪深き生れぞや。

と缺より珠數取出して不覺に念佛を唱へ初めぬ。

然ふして此の刻甚なる夫婦の最期の爲に最も痛く胸を感たれたるものは阿貞なり。渠は老嫗の陳述警官の断案以下人々の言ふ所に今更の如く耳を傾け、方感胸中に蝟集し來り、妾嚮に家を出る時公然法庭に對戰ひて滅亡の淵に投入るべき深仇の、脆くも自ら亡ひしとを深くも遺憾と思ひたりしか、眼前此凄まじき最後の慘状を見ては、是までの怨恨を忘るゝのみかは、自個の罪業の輕重までも懷はれて、心畏ろしくこそ覺ゆれど、猶ほ幾度か嘆息して夫婦の罪を斷ちたる刃と心に問ひつゝ、徐ろに手を延べて鮮血淋漓る刃を握らむとす。人々の怪しみ見る間に、祖母は魂消て兩手を擧げ危うし危うし。御身は其刃をて何をか爲玉ふ。と阿貞の手を遮れば渠も一たび手を收め、問ひ玉ふまでもなし。妾は望の絶えたる

西 阳 樓

(九一)

身あり世にありて用なき者也。是よりは唯世を遁れむのみ。老嫗は思はず嗚咽出でて痛はしや。愛子を失はせ玉へば、然か思ひ立ち玉ふも理なれども、其は一旦の哀傷にこそ御身吾身の齡にも在さねば、望の種子は猶ほ幾個も授かり玉ふべし。女性の責任未だ半をだにも畢へ玉はねば、今容を變へ玉はむは餘りに早く、太と惜し。儀助も亦傍より東陽樓は勿論なり、此家にも今より御身の在さずば能ふまじきに、若し今遽に世を棄て玉は、二個の店、數多の妓女、我等までも惑ひなむ。阿貞は太息して涙を湛め、妾が髪を断むと思ふは、真個に前非を悔ればなり。そを止め玉ふは太と情なし。是は妾の心底を知り玉はねば無理にもあらず。三郎が没する前日、渠は妾に此家を恢復し、營業を廢めて世を離れよと懇意にも諫めたれども、妾は夫婦の企圖はや既に熟せると、殊に阿國の虎狼より恐るべきことを説き、我が東陽樓を起したるも此故なりとて、肯かざりしかば。渠は遂に怨を呑みて身を亡ぼしゆ。今斯く夫婦が脆くも自滅したるを見れば、惜きは渠が生命なり。今や二個の家を擧げて、世を遁るゝは掌を反すよりも易けれども、渠を返さむ由はないし、當時渠に聽きだにせば——眞個に渠に聽きたにせば、愛子も亡びず、玉子も失

は此家を賣れ。栗田の君に報謝を爲し、三郎、玉子の石碑をも立て、夫婦も懇に葬りて、其墳墓をも立てよ。斯くして餘る所に此家の價を加へて、人とに分ち與せよ。妓女等は童女の倍を取り、御身は是等の役によりて妓女の倍を取れ。

斯くて四邊の妓女等に向ひ、「今妾が御身等に告ぐる所を好く聞き玉へ、親の爲め親を養はむの赤心あらば、身を賣らずとも、他に方便は多くあり、神佛も亦冥助を垂れ玉はむ。人に嫁きて良配となり、世に出て用に立つべき子を育て、賢母とも稱ばれ。正しく婦人の道を踏みて、後より来る婦人の嚮導こそすべき身を、一時の厄に金錢に代へ、世人に玩弄はれ、世人を迷はし、無垢の心に罪を染め、善人を悪人とたる阿國を見よ。若し此曲に身を賣りだにせづば、如何なる毒婦に生るとも、家をなし、身も亦思ひよらぬ惡事を積むと、そも如何ばかりの惡業ぞや。眼前身を亡したる阿國を見よ。若し此曲に身を賣りだにせづば、如何なる毒婦に生るとも、家を奪ひ人を殺し、良夫を亡ぼす大罪を犯すとはよもあらじ。若し身を賣りて道に合はば、御身等の善き志を就さしむる妾の營業にも、身を賣りてすら此業を營なむ妾にも、無量の好運こそあるべきに、望ある子は長たず、世を遁るべき時に遁れで、

はず、夫婦の人とて斯も酷くは死ざるべきに、妾が拒みし一事故に四個の生命を斯く喪へり。妾は極重惡人なり。此大罪を負へる身の佛の道に入らずして何くに往かむ。あはれ止らずに妾が願を成させ玉へ」と、再び手を伸べて刀を握れば、愴然たる満坐、敢て止めむとするものもなく、祖母も今は涕を啜りて一語なし。刀は今血を滴れつゝ、舉り、看る間に髪は兩個になり、鬚は聲なく膝に落ち来て、一點の天露女丈夫の眼に湛れり。ア、子の言に従ひたにせば、縱ひ世を遁るとも、斯くまでは遁れまじきに満坐相顧みて面を掩へり。

阿貞は今刀を錯きたり、涙拭きて容を改め、儀助を呼びて鬚を附し。是を太守の君に呈げよ。遺物と云はむは失禮なれど、所之知れすとて淫奔たるものと思はれんも太と遺憾し。委細は御身口づから傳へあげ、東陽樓は君が爲し玉ふに任せよ。若し命玉ふことあらば、御身一臂を副玉へ。御身は吾身の時より勤てあれば、家政も略ぼ解してあらむ。殊に愚痴なりと笑はれしほと正直なれば、後事は御身に托まむ。夫婦に如何なる企圖ありとも、帳簿と券とを皆蒐めて栗田の君にまで致り、御身妾の代理人として法庭に出てなば、故紙一頁も失ふとはあらじ。事定まら

斯まで酷く世を遁るゝと、他の故ならず。各々世を益すべき御身等を購ひて、世の底の牢に幽閉めたるが上に、世人のため御身等の爲め、阿國の如き婦人の爲め、犯罪場を備へたればなり。妾が今此家を棄てゝ分つも、せめてもの罪亡しなり。贊物には足らずとも、心のまゝに嫁き玉へ再び遊女の身になりそ。幾個の子を生むとも貧しきとて其子な賣りそ。世人の如何に稱るども、罪は罪なり、竊盜殺生と同じ報酬を受けたる吾身をよく記えよ。女人の容喙へきことならねど、儀助も事了らば此巻を去り、他の正業を擇み玉へ。

二十餘個の妓女等は各々自個の経験よりして多少世間を解したるべきが故に、一場の悲曲の爲に慙く悔悟せしや否を知らずと雖然れども其先輩なる阿國の慘しき最期、其前の主婦なる阿貞の痛ましき遁世に感ぜられたるは、皆一様にてありしなり。今や懺悔、道理、恩情教訓、交々至れる阿貞の辭の切なるに深くも感激して涕を垂れ、童女等までも亦袖を濕しぬ。玉藻、自ら底なき淵に沈み、修身浮ぶ期なき妾等を解きて、舊時の身に返し玉ふのみあらず、多分の贊物まで恵み玉ふ無上悲慈感謝すべき辭もなし。今は唯命へ玉へる如く、錦衣を着て故郷に歸らせむ。思

斯まで酷く世を遁るゝと、他の故ならず。各々世を益すべき御身等を購ひて、世の底の牢に幽閉めたるが上に、世人のため御身等の爲め、阿國の如き婦人の爲め、犯罪場を備へたればなり。妾が今此家を棄てゝ分つも、せめてもの罪亡しなり。贊物には足らずとも、心のまゝに嫁き玉へ再び遊女の身になりそ。幾個の子を生むとも貧しきとて其子な賣りそ。世人の如何に稱るども、罪は罪なり、竊盜殺生と同じ報酬を受けたる吾身をよく記えよ。女人の容喙へきことならねど、儀助も事了らば此巻を去り、他の正業を擇み玉へ。

二十餘個の妓女等は各々自個の経験よりして多少世間を解したるべきが故に、一場の悲曲の爲に慙く悔悟せしや否を知らずと雖然れども其先輩なる阿國の慘しき最期、其前の主婦なる阿貞の痛ましき遁世に感ぜられたるは、皆一様にてありしなり。今や懺悔、道理、恩情教訓、交々至れる阿貞の辭の切なるに深くも感激して涕を垂れ、童女等までも亦袖を濕しぬ。玉藻、自ら底なき淵に沈み、修身浮ぶ期なき妾等を解きて、舊時の身に返し玉ふのみあらず、多分の贊物まで恵み玉ふ無上悲慈感謝すべき辭もなし。今は唯命へ玉へる如く、錦衣を着て故郷に歸らせむ。思

りながら御身一個世を過し玉はむ程は如何様にもなりぬべし。心易く思しめせ。儀助定めて家に貯金もあるへし。出して祖母御に呈らせよ。悠久嬉しく來ませし旅路を又一個歸り玉ふ心の中、如何ばかりか寂しく在さむ。儀助疾く疾く呈らせずや。老嫗は再び嗚咽ひ出で厚情のほどは謝するに餘れど、今ははや吾身に要なし。御身すら姿を變へ玉ふ世に、此白髪の嫗、何時までか娑婆に住まむ。是より直ちに回国巡禮の道に上り、觀世音の來迎を乞ひて、懷かしき孫女をも見有りがたき婿君をも祝ひ、嚮に逝かれし二個の人にも相遇はむ。三十三番は美濃長谷寺、吾身の生れも笠松よりは里程遠からぬぞ。此齡にては、故郷近く回らむとしも思はず。唯身の終る處を假の宿の最後とせむ。——姫等よ益なき言を重ねるに似たれど、唯今主婦の宣ひつる如く、子孫を無情待ひ玉ひそ。七十五の高齡を重ね、家にありては闕を下らす、戸を出でば軒端を去らずあるべき身にして、孫女を賣りたる因縁ゆゑに、遙々と迷ひ来ても尋ねぬる孫女には逢はず、往生を願ふ益なく眼前に修羅地獄を見、遂に卒土婆小町の如く、罪を負ひ業を暴して野に山に歩き斃む外なき、此祖母が如くになり玉ひそ。皆年少く、美き姫等なれば、良き縁にこそ就き

玉はめ、優く良夫に順ひ玉へ、姑御の無情かるども、自個も壯き始なりと思ひて忍び玉へ殊に愛らしき童女等よ齡同しき御身達を見るごとに思ひ出されて。と、祖母は涕を啜つゝ、阿玉はさこそ御身等を煩はしつらめ、渠は御身等の厚情を報はで失てねれば、祖母より篤み辭謝すあり。故郷に歸り玉は、祖母御も兩親も在すらむ、怠らず孝行して良き娘子となり玉へ、決して我意を張り玉ひそ阿貞に向ひ「いざ立ちさせ、婆婆の岐路まで吾身も伴せむ。」

玉藻は暫時と老嫗を留め、玉子の祖母御なりと云ひ、懇到なる教訓を辱なふして初會の人とも思はれず。殊に玉子に酷かりし妾なれば、非薄なれど、祖母御に祖道せむと欲ふも、せめて亡魂への陳情なり。今少時待たせ玉へ、斯く云ひて室に走れは他の妓女等も、二個走り、三人走りて、童女等も相喚び還り、須臾にして復た坐に満ちたり、玉藻は先づ封紙を老嫗の前に呈して、卿鞋錢にも收め玉へ。此花以下交る交る持來しものを出して、禪衣にもなし玉へ。金剛杖を購ひ玉ひ。珠數、手拭の料には足らねど、其他孰れも眞情を餌けぬ。老嫗は涕洟みて喜び、姫等の誠意の贈り物豈でかは空に受くべき。姫等の好情によりて、以前にもなき富者となりぬ。と、

渠は一一感謝して懷中に納めたり。儀助は出て來りて主婦の命じたる黃白の菴草を主婦に呈ぐれば主婦は旅行の費用に充て玉へ。とて老嫗に與へ、儀助も亦自個の贈物を進めて、餞別と云はむは太と恥かし。賽錢にも充て玉へ。前夜は我あらぬ室を玉子の室と白せしは、主人の命なりとは云へ、懺悔せされば心安からず、痛くな我を咎め玉ひぞ。吾郷は紀州粉川の閨外なり。御身粉川寺に詣で玉はむ頃は、我も亦歸りてあるべければ、路の次に訪ね玉へ、上地より歸りし儀助と問ひ玉はい必ず識れなむ。宅は巷端より見へてあり、訪ひ來まさは、家には老たる兩親あり、必ず御身を歡迎へむ。若し靈刺にても書かせ玉はい、龍藏先生と云ふ有名なる學者もあり、亦阿瀧と云へる信心者、阿谷と呼べる怡快き老嫗もあり、此の人々嚮に遊覽のために上京りて、五六日前に歸られぬ。御身來まさは、吾身親しく紹介せむ。祖母は渠が裏表なき實意に感じて涕を拭き、眞實深き御身の心よ。生存へて粉川寺に詣ては、必ず尋ね參らせむ。儀助主と呼はるゝとか。御身の名と厚志と忘れぬ様能く記へ置かむ。と漏るとなき厚情を謝し、阿貞を催して身を起しぬ。

満坐は皆離別を惜み、門前まで送りて出れば、微茫として天は明け初めぬ。一同はや夜は明けぬ、心靜に旅立せ玉へ。祖母一河の流、一樹の蔭も他生の縁。偶々邂逅て他人ならぬ好情を受けぬ。願くは姫等の幸福壽命を、觀世音に祈りてこそ報はめ。阿貞さらば是より相別れむ。孰れも身を重じ、病を厭ひ、昔時の直き心に返りて、世をば美しく過ぎ玉へ。今生にてはもはや遇ふまじ。再會は未來にこそ。

斯くて留まるものは暫時く留まり、往くものは永遠く往きたり。

明治二十五年六月五日印刷

同 年六月九日出版

# 版權所有



著者

宮崎湖處子

發行者

和田篤太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地  
一丁目二十三番地

印刷者

根岸高光

發行所

春陽堂

## 稟告

江湖御花主様方倍々御繁榮奉賀候豫て御吹聴申上候通り弊店は他の赤本書林と目的を異に一世運風潮に先立ち文學社會に錚々たる大家方の手に成る新規新案の原稿相選ひ製本に注意逐次出版致候間愛顧諸君方御賛成御講諭の程希望仕候  
此實價書目の外百般の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候  
聞書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も從來の赤本は説目計りにてよろしく直段は無油斷他店より一層廉價に相勧き候間自然高價にも差上候時は御申越次第直引可申候  
送金方は内國通運早便又は銀行或は江戸橋郵便本局宛等のかはせにて何れも前金に御願申上度候  
御注文書着三日以内に必ず出荷可仕候  
此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該實價書目の内特別一割引にて御送り申上候  
郵券代用は一割増にて願上候  
宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて判然御認願上候  
御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書目御送り可申候  
前件は下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋  
通四丁目角

春陽堂

和田篤太郎

名氏所住の君諸々るらせ求購を類籍書

名氏所住主文注御

書目書道

文部省檢定

# 近世地理學日本之部 完

正言第三版

# 文部省定省檢定地理學日本之部完

文部省檢定  
ト部準平 大島孝造同著  
**應用數學三千題**

撰新數學五千題解式 全二冊  
大島孝造著 珠算五千題 全三冊  
大島孝造著 應用二百五十題集 全一冊  
大島孝造著 小學珠算題叢 全二冊  
郵稅二十  
郵稅十五  
郵稅十二  
郵稅八  
郵稅六  
郵稅四  
郵稅二  
錢錢錢錢  
錢錢錢錢

文部省檢定済  
大島孝造著  
○訂正新  
三版 撰 數學五千題

理學士櫻井定二序 理學士久  
○化 學 教 科 書 全

郵稅四錢  
七  
十  
六  
錢

|    |                   |
|----|-------------------|
| 中卷 | 正價廿二錢郵稅四錢         |
| 上卷 | 命位加減乘除同雜問○諸等諸法○分數 |
| 目次 | 諸法同雜問○小數諸法同雜問○四則應 |
| 下卷 | 用問題               |
| 中卷 | 正比例○正轉混合問題○單利法案分遞 |
| 目次 | 折比例平均算○轉比例○合率比例○連 |
| 下卷 | 鎖比例損益算○和較比例       |
| 目次 | 開平乘法              |
| 下卷 | 累積法               |
| 目次 | ○○開立法             |
| 下卷 | ○○重立法             |
| 目次 | ○○復習法             |
| 下卷 | 求諸法               |
| 目次 | 複習雜問              |

商業學校得業生堀口義三著  
○商業簿記教科書 全  
○故卷  
○菱譚眞艸千字文 全  
○明治算法新書 全  
○正合級教授術 全  
○石田幸二郎著 衣服裁縫獨案內 全

郵十郵十郵十郵二郵十  
稅八 稅 稅 稅 稅 八  
四 二 二 四 十 二  
錢 錢 錢 錢 錢 錢

○ 横川先生著『對照漢和漢對』全二冊

○ 伊藤桂洲著『震世文體明辨』全四冊

○ 岡三慶著『明治活用文證大全』全四冊

○ 皇朝大家人物論 全一冊 紙本半

○ 佛國ルーソー原著法學士原田潛譯『勝海舟翁序』

○ 松島剛譯『日清文明論合卷』

○ 平塚定二郎合譯『國家論』全一冊

○ 太郎氏著伊藤伯内閣史『中村千太郎氏著伊藤伯内閣史』

○ 改正徵兵令

○ 現行大日本稅法大全

○ 行稅現行罰則集

○ 小池川著掌中『官民必携諸規則罰令』

○ 市町村制詳解 全

郵貳郵十郵廿郵五郵金郵廿郵十郵一圓郵五郵三稅十  
稅拾稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅  
四二四五二十八壹八五四十廿十二

錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢錢

饗庭著 篁村 小說むら竹

全部廿卷 合卷五冊  
大凡三千頁  
美製實價壹圓五十錢  
運費廿錢

文學世界

半紙木板摺  
彩色宏紙頃  
美本

第一集　至第一卷  
第二集　至第八卷  
第三集　至第十二卷  
第四集　至第十六卷  
第五集　至第十九卷  
第六集　至第二十七卷

玉簾窓の月　下宿屋　走馬燈  
櫛へ所　他山の石　松の雨　坪撰み  
通人　人の噂　深山木　納涼臺　藪椿　三筋町の  
毒鏡　水の流れ　義理の棚　翻譯小説目  
雪の下萌　魂膽　病の原因　藝が身の  
恩に酬　影法師　ムツカシヤ　軒の  
垂水　跡取息子　時の用　振分道　人の  
行末　文の間違　大阪の話　闇の梅  
權妻の果　面目玉　俳優氣質　夜  
の錦　つり堀　中よし　擬博多　時  
雨の舍り　兒の手柏　廻り車  
煩惱之月　腹の子　大石眞虎の傳  
當世寫眞鏡　暗の烏　縁の糸　め  
かし損　當世寫眞鏡　孝女の幸ひ  
作り菊　糸の亂れ　當世寫眞鏡　苦  
樂　蓮葉娘　對扇　紅葉　小町娘　新  
生石　川　添柳　父杞行　房州紀行　鹽  
木　入浴の記　秋父杞行　ぐりの記　新  
原道中記　は草は草

新竹一書

半紙木版摺極彩色表紙口畫入美本  
一冊讀切各實價三十三錢郵稅未  
收

○一一番 紅葉村人著  
○二一番 妙山人著  
○三一番 山齋田人著  
○四一番 三昧人著  
○五一番 新人著  
○六一番 道人著  
○七番 六番  
○八番 五番  
○九番 四番  
○十番 三番  
子露外南得幸散香居學主南道三  
伴史翠知堂人雪士海人新入人著  
著 著 著 著 著 著  
風流魔妻嘶嘶夜蓬萊梅十津川  
近刻全全全全全全全全全全

○一卷 香雪著 花の種 全一冊  
○二卷 散人著 紅葉著 新色懺悔 全一冊  
○三卷 山人著 山田美 妙齋著 全一冊  
○四卷 南翠著 外史著 やたらトマ 全一冊  
○五卷 抱一庵 主人著 臥待月 全一冊  
○六卷 廣津柳 浪子著 闇中政治家 全一冊  
○七卷 梶のみだれ 全一冊  
○八卷 三昧道人著 恋の重荷合卷 全一冊  
○九卷 忍月著 伴子著 七變化全一冊  
○十卷 幸堂著 村全一冊  
○十一卷 得知著 さゝきげん 全一冊  
○十二卷 竹の舎著 雪達摩 全一冊

|       |       |     |
|-------|-------|-----|
| 花の種   | 新色懺悔  | 全一冊 |
| 山人著   | 妙齋著   | 全一冊 |
| 南翠著   | 外史著   | 全一冊 |
| 抱庵著   | 主人著   | 全一冊 |
| 廣津柳   | 浪子著   | 全一冊 |
| 糸のみだれ | 闇中政治家 | 全一冊 |
| 戀の重荷  | 系のみだれ | 全一冊 |
| 三昧道人著 | 三昧道人著 | 全一冊 |
| 露伴子著  | 露伴子著  | 全一冊 |
| 忍月著   | 忍月著   | 全一冊 |
| 居士著   | 居士著   | 全一冊 |
| 幸堂著   | 幸堂著   | 全一冊 |
| 得知著   | 得知著   | 全一冊 |
| 竹の舍   | 雪達摩   | 全一冊 |
| 主人著   | 全一冊   | 全一冊 |

版二第作著人山葉紅

The image shows a large, bold, black ink-style logo or signature on a yellowish-tan background. The logo consists of several thick, expressive strokes. On the left, there are three vertical strokes of varying lengths, with a horizontal stroke extending from the middle one towards the right. This shape is reminiscent of the Chinese characters '大' (large) and '方' (square). To the right of the logo, the background changes to a dark, textured vertical panel. Below this, there is a horizontal panel with a prominent yellow rectangular shape, possibly representing a piece of paper or a seal.

This image is a traditional woodblock-style illustration. In the upper left, a large, bold character '牛' (ox) is rendered in a light beige or cream color against a dark, textured background. The upper right corner depicts a detailed scene of a garden or landscape, featuring stylized trees and flowers, with a prominent yellow flower at the top. Below these elements is a large, circular emblem or seal, also in a light beige or cream color. This circle contains a stylized dragon-like creature with its head turned back, facing its own tail. The entire illustration has a distinct aged, monochromatic aesthetic.

錢六稅郵錢五十價實

露子姫

版三

丁々子著 美なれ咲 完

實價十五錢

|                 |                 |                 |                 |                 |                 |                 |                   |                  |                                    |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------------------------|
| ○外南<br>史翠著<br>金 | ○外南<br>史翠著<br>萬 | ○外南<br>史翠著<br>行 | ○外南<br>史翠著<br>滿 | ○外南<br>史翠著<br>旭 | ○外南<br>史翠著<br>隱 | ○外南<br>史翠著<br>照 | ○外南<br>史翠著<br>悲慨世 | ○須<br>翠著<br>美    | ○南<br>翠著<br>一<br>笑<br>翠著<br>新粧の佳人全 |
| 香               | 春               | 路               | 春               | 章               | 君               | 日               | 照                 | な<br>リ<br>ご<br>全 | 外南<br>翠著<br>一<br>笑<br>翠著<br>新粧の佳人全 |
| 露全              | 樂全              | 難全              | 露全              | 旗全              | 子全              | 葵全              | 悲慨世               | な<br>リ<br>ご<br>全 | 外南<br>翠著<br>一<br>笑<br>翠著<br>新粧の佳人全 |
| 外南<br>翠著<br>金   | 外南<br>翠著<br>萬   | 外南<br>翠著<br>行   | 外南<br>翠著<br>滿   | 外南<br>翠著<br>旭   | 外南<br>翠著<br>隱   | 外南<br>翠著<br>照   | 外南<br>翠著<br>悲慨世   | 須<br>翠著<br>美     | 外南<br>翠著<br>一<br>笑<br>翠著<br>新粧の佳人全 |
| 外南<br>翠著<br>金   | 外南<br>翠著<br>萬   | 外南<br>翠著<br>行   | 外南<br>翠著<br>滿   | 外南<br>翠著<br>旭   | 外南<br>翠著<br>隱   | 外南<br>翠著<br>照   | 外南<br>翠著<br>悲慨世   | 須<br>翠著<br>美     | 外南<br>翠著<br>一<br>笑<br>翠著<br>新粧の佳人全 |

郵稅四錢  
郵稅六錢  
二十  
二十  
十  
郵稅四錢  
郵稅八錢  
二十八  
郵稅六錢  
十八  
郵稅六錢  
十八  
郵稅六錢  
十八  
郵稅六錢  
十八  
郵稅六錢  
十  
郵稅六錢  
十  
郵稅六錢  
十  
郵稅六錢  
十  
郵稅六錢  
金廿錢

丁々子著 美だれ咲 完  
前田香著 新形蒔繪護謨櫛 全  
雪散人著 散人菊譯 月雲兩面鏡 全  
採人藤譯 椿の花杷全  
加紫霧の屋大川物語全  
塚主の著人著 洲原著 曼府の叛亂全  
蓼原著 爐村著 新方萬金丹全  
火扇淡路島 當世大風呂敷全  
埋花雜談春のやまく 全  
幸堂得知作 蓬庭著 新方萬金丹全  
火扇淡路島 當世大風呂敷全  
経岡本著 幸福之種 全  
増補大坂軍記 全  
麻溪居士著 春亭九華校補 眞美人 全  
岡本著 幸福之種 全

版二 第

南洋乃大波瀾

(政治小説全一冊實價金四十五錢郵稅六錢)  
未廣鐵腸居士の政治小説多一と雖其規模の廣大に  
して巧みに政治上社會上の有様を寫出一人を一て  
忽ち笑ひ忽ち怒り忽ち痛哭せしむる此書の如きは  
未だ曾て有らざるなり居士が胸中の不平慷慨は卷  
いて南洋の大波瀾となす故に字々活動して筆々神  
あり誠に近來絶無の一大小説なり



紅葉山人著作 小說伽羅林

三十錢

ちぬの浦再  
なみ六著考  
二月

美製大本實價金廿錢郵稅四錢  
うて退け、まかりつんでたは正徳享保に男を賣た三日月次郎吉、繩  
囃緒の駒下駄に江戸の八百八町を踏鳴らし、飛鳥の山の落れ狼籍  
を袖に止めて、うてば響く六尺の身に伊達様の詰さばき、大江戸  
に一名物を添へ一町奴で御座るは  
人は花に眠り月に醉よの今日此快絶壯絶の書いづ、結席の奇抜斬  
新は更に言す、字々飛動、句々靈活、大俠が斗の如き膚毛玉の如き  
情を寫へ來つて讀者の眉を昂げ肉を動かす、思軒居士が眞摯勁健  
の序文は著者の人せなりを描出へ若者が自筆の口畫は優に大俠の  
動きいでんとするの趣あり、且一回毎に嚴肅の細評ありて一層の  
觀を添ふ、疑ふ者は試みに繙け

書中  
樂。●第三好丈夫平野次郎●第四薩摩下り  
僧月照。●第五双俠近藤正慎。大福院百歩●  
第六猿が辻姉小路公知朝臣●第七生碟毒婦  
荻野●第八古狂生頼三樹●第九古壯士木戸  
公●第十無賴漢木戸公忠僕甚助

大本極美製實價三十錢郵稅六錢

妙山著  
森田美新二丸引新太平記版再

郵金實  
稅四廿  
錢

帆雨樓主人著 櫻痴居士閱

錢五十二金價買  
錢八稅郵

餘頁十三百三版菊本美類無

羈業根遂に堅く怪物其幹に培へば枝は天日を支  
へて一天常に漠々。男兒毒を啖はゞ皿まで舐れ、  
こゝに足利の天下を固めて兎も角も十三代、此  
腕の力に向ふ敵聊も日本に無いか笑止な！幹腐  
れて虫生じ、國衰へて乃ち革命。革命を衰世の反  
動と思ふたなら吾佛獨尊の亂臣賊子の評は言へ  
まい……足利直義舌

○今 日 之 東 京  
○山 紅 葉 人 著  
○福 地 源 郎 著  
○窟 山 小 著 尊 號 美 談 子 全  
○室 重 弘 改 造 社 會 眞 壯 婦 全  
實 價 金 廿 五 錢 郵 稅 六 錢  
郵 稅 一 錢 錢 錢 錢  
郵 稅 二 錢 錢 錢 錢  
郵 稅 五 錢 錢 錢 錢  
郵 稅 十 一 錢 錢 錢 錢  
書 中 日 緯 奇 男 見 美 人  
上 中 下 四 一 刻 錄 二 三 錄  
第一回 第二回 第三回 第四回





石黒忠志先生評序 谷口吉太郎君纂  
通俗病理問答 第一編 内科の部

附即治法

通俗病理問答 第二編 外科の部

流行病ある時の心得  
此書は人體解剖の細圖を付し各自治療の出來得る  
様藥名調合法及養生方法等詳細に記載あり

●心得期 ●衣服 ●住家 ●婚姻 ●交媾 ●妊娠 ●小兒期 ●幼年期 ●成年期 ●壯年期 ●老年期 ●人世の快樂 ●疾病原因及注意 ●傳染八病の原因及豫防法 ●虎列刺 ●腸室扶斯 ●赤痢 ●實扶的里亞 ●痘瘡 ●梅毒 ●疥癬 ●人間福利の階級 ●資質の區別 ●發力の強弱(完)

●本書實に東京淺草瀬山佐吉なる者龐惡なる類似偽板出版致し  
直ちに差止候へ其地方賣捌へ直段の安き爲め回り居候誠も難  
計候間著者及出版所御吟味の上御買間違なき様御注意願上候

# 橋爪一譯男女交合新論

全金十錢 郵稅四錢

●目錄 ●第一交媾は最も貴重すべし ●第二愛情は  
情人と交媾せんとの望みに出 ●第三交媾は男女の  
構造愛情及び婚姻の精神たり ●第四交媾の適否に  
依て利害苦樂を異にする ●第五交媾の目的及び其方  
法 ●第六兩親の形狀性質等は其兒に遺傳す ●第七  
父母たるべき者は未生兒の爲に其才德行狀を修養  
すべし ●第八精神の愛は設生に必要なり ●第九精  
神の愛を以て爲す交媾は淫慾の爲に爲す交媾より  
も許多の快樂を生ず ●第十精神の愛は淫慾を壓し  
淫慾は精神の愛を壓す ●第十一愛情と生殖器とは  
相感應す ●第十二愛戀する人は陰具勃張し厭忌  
する人には陰具萎縮す ●第十三愛情と交媾とは必  
ず相伴ふ ●第十四甲に愛情あつて乙と交媾するは  
姦通を重ねるあり ●第十五情慾は設生に必要なり  
●第十六交媾には男女とも盛に情慾を發動すべし

貫橋一譯男女交合新論

全金十錢

廿五年六月發行

## ちぬの浦 奴の小万 完

定價金三十錢 郵稅六錢

浪六氏が引絞つたる満月の弓勢、その三の矢とて兵と放ちたるは此小説なり、諸君が胸の鐵的にグサと貫くか、但一外れて他の岩石に鎌くだけんか、試みに受けて見玉へと申すは萬事に自慢せぬ

## 新作小説

伊竹同女之助完

東京日本橋区通四町目角

春陽堂發行

三日月の影よチラと見へしまゝ世人が待ちよ待つて  
ヤイノくと焦れたる女之助いよくめかしこんで顯れ  
たり、著者は浪六、文致意匠は更よ喋々せず、表紙口畫等の  
刷師を泣かせて美麗高尚を極めたるは本店いまだ此書の如  
きあらず且つ御断り申上ぐ女之助は男あり、姿ばかりを見  
て浮かれ玉ひや 大本美製實價三拾錢郵稅六錢



菊判半裁形無類美裝

實價金廿錢 郵稅四錢



東京日本橋区通四町目角

春陽堂發行

○八重櫻里の夕暮全

郵稅二錢

○春の恋の妻折全

郵稅二錢

○子著春の夕暮全

郵稅二錢

申す

之れを讀む者はいゝ子讀まぬ者もいゝ子讀むと讀  
まぬは御勝手なれども買ふと買はぬは御勝手にあ  
らず是非共一本を購ひ玉はれど慾の無い春陽堂が

申す

正太夫記

評者劇童只好

太華山人・思軒居士・南翠外史

錦隣子・三昧道人

實價五錢

郵稅五厘

十七

第五版

第二版 沢山の花

正直正太夫著

實價金廿錢 郵稅四錢

東條竹翠著

郵稅二錢

正直正太夫著

評者劇童只好

太華山人・思軒居士・南翠外史

錦隣子・三昧道人

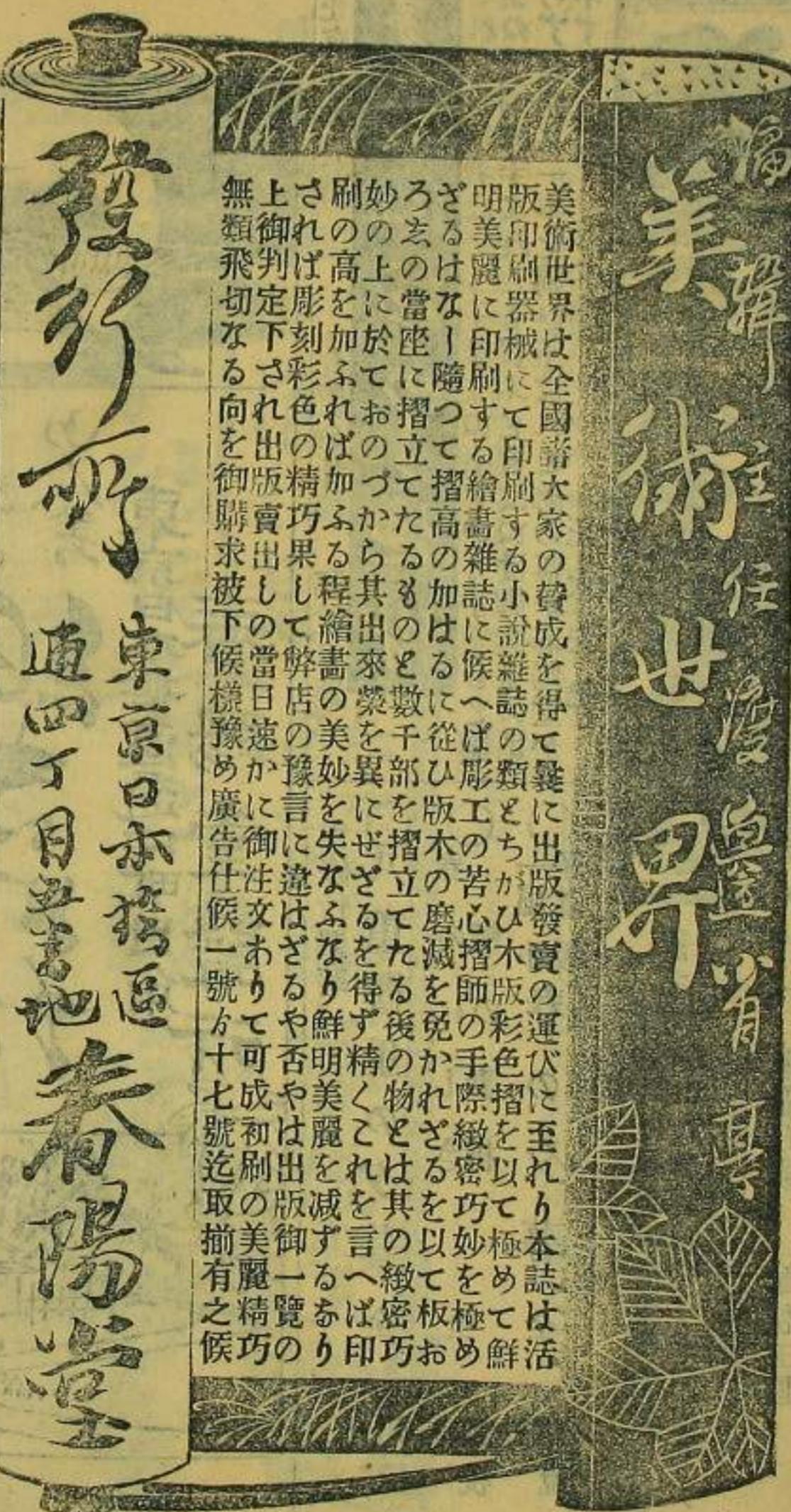
郵稅二錢

正直正太夫著

實價五錢

郵稅五厘

十八



美術世界は毎月壹回發行實價二十錢十冊前金二圓八十錢郵稅一冊に付四錢郵券代用ハ壹割増ニ錢切手に限  
美術世界は木版彩色奉書摺極上等製本の美麗ある繪畫雑誌也